

ソ連人の魯迅論

Ⅱ (フェドレンコ)

川上久壽

フェドレンコ (Н. Т. Федоренко) はパズネーエワ (П. Л. Позднеева) に劣らずたくさんの魯迅論を発表している。それらのうち「ソヴェト同盟における魯迅関係文献」(「人文研究」第14輯所収)にのせたものゝほか単行本となっているものには、次のようなものがある。

Великий китайский писатель Лу Синь, М., изд-во «Знание» 1953.

(偉大な中国作家魯迅, モスクワ., 「ズナーニエ」出版, 1953)

Китайская литература. М., Гослитиздат, 1956.

(中国文学, モスクワ., 国立出版所, 1956)

Китайские записи, М., изд-во «Советский писатель», 1955.

(中国游記, モスクワ., 「ソヴェート作家」出版, 1955)

Лу Синь (в кн. : Лу Синь, Собрание сочинений, т. I. М., Гослитиздат, 1954)

(魯迅, ロシヤ語訳魯迅選集第1巻, モスクワ, 国立出版所, 1954)

これらのうち、わたくしの読んでいるのは「中国文学」だけである。それにこのほかのものとしては、「中国作家短篇集」(Рассказы китайских писателей)のはじめにある解説中の魯迅論、もう一つは中国語訳の「魯迅」(費徳倫科 Feidelunke) 1953年「泥土社」出版にかぎられている。これ以外のものは手入困難あるいは書店に注文中のもので読んでいない。それで全面的にフェドレンコの魯迅論をみることはできないが、「中国文学」のなかの魯

迅の章は、フェドレンコの魯迅論を集約的にあらわしているのではないかと思われる。というのは、「中国游记」はすでに極東書店の「書報」に一部の訳がでたようなものであるし、露訳選集のものは、わたくし所蔵の第2, 3, 4巻を見ても短いものであろう。ところが、「中国文学」の魯迅の章は53頁をつかっている。わたくしの知るかぎり、最もながいものであり、前記の「中国作家短篇集」の解説でふれている魯迅論も、このなかに含まれるからである。これはまだ中国でも翻訳がでていない、はじめ、わたくしはこの要約を紹介するつもりであったが、フェドレンコの魯迅論をぜんたいとしみるためには不足を感じ全訳をのせることにした。したがって、本稿はがんらい「小樽商大人文研究」にのせるべきものではないかもしれない。学究的な先生から人文研究でなく人文紹介であるとおしかりをうけそうである。こういう学究的先生は中国にもいたし、日本にもいる。しかしヘタな(?)論文よりは翻訳や紹介の方がずっと学界に寄与することもありうるだろう。すこし長いが、全訳をのせるゆえんである。

フェドレンコにかぎらずソ連人の魯迅論には一つの空白がある、それは「野草」についてほとんど沈黙していることである。フェドレンコのばあいでも、「野草」について数言をついやしてはいるが、「呐喊」「彷徨」でのような具体的分析はない。最近でたソローキン (В. Ф. Сорокин) の「魯迅世界観の形成」(Формирование мировоззрения Лу Синя)にも「野草」論はない。あのニヒリズムの傾向のつよい散文詩はソ連人にとってとっつきにくい代物なのかもしれない。それから、フェドレンコの魯迅論には、毛沢東、瞿秋白、馮雪峯、丁玲、曹靖華、郭沫若などからの引用がおおい。とくに、馮雪峯から引いた言葉は圧倒的である。ところが、中国では反右派闘争によりこれらの人びとのうち馮雪峯と丁玲が槍玉にあげられ、批難攻撃が集中し、その魯迅論さえもいぜんの光彩を失つた観をていしている。しかし、これはまちがいのような気がする。馮雪峯は瞿秋白いらい中国の魯迅研究家としては大家である。わたくしは、げんざいたくさん出ている中国の魯迅論者よりも馮雪峯を高くみている。したがって、わたくしから見れば、フェドレンコの魯迅論が、馮

雪峯、丁玲をおく引用していることは、けつしてそのねうちを下げるものではないと信じている。

さいごにフェドレンコの経歴について、わたくしはくわしく知らないが、現駐日ソ連大使であり、モスクワ大学卒業、大学では簡約華露辞典（Краткий китайско-русский лексикон）の編者コロコロフ教授（Колоколов）に学び、学位論文は「楚辞の研究」、大戦中ながく重慶に滞在していたそうである。これは、先般、茅綏長の招待で東大を訪れた同大使と面談された東大の橋本萬太郎氏の御教示によるものである。

(1959. 5. 14)

魯 迅 フェドレンコ

1. 魯迅の生涯と創作の道
2. 現代中国文学およびそのリアリズムの方法のモといをさだめた魯迅
3. 革命的文学者・政論家としての魯迅
4. 魯迅とソヴェト文学
5. 魯迅の言語と芸術的方法

魯迅は中国における文化革命の舵手であった。彼は偉大な作家であったばかりでなく偉大な思想家であり、偉大な革命家であった。魯迅の骨は堅く、彼には奴隷根性や屈従のかけがない。これこそ殖民地、半殖民地国家の人びとにとって最も貴い性質である。魯迅は人民の大多数を代表し、文化の戦線で敵の陣地を強襲したところの最も申し分なく、最も勇敢で、最も決然とした、最も忠実で、最も燃えるような従来まれにみる民族の英雄であった。⁽¹⁾

魯迅は新中国文学の創始者である。文学の新らしい道の探求は、魯迅によって何よりもまず彼の基本的テーゼ——文学は人生の利益、人民の利益、祖国に仕えねばならない——によっておこされた。こゝに、中国の新文学の成生と発展にそれほど卓絶した役割を演じた魯迅のリアリズムの源泉がある。魯迅の

(1) 毛沢東、新民主主義論、毛沢東選集第3巻、モスクワ、1953年、256頁

あらゆる創作活動は中国人民に対する信頼によって浸透されており、たゞ一つの愛国的任務に従属している。

『魯迅は、——と中国の著名な文芸学者馮雪峯は書いている——中国における人民民主主義革命の陣地に立つた偉大な啓蒙家であり、20世紀のリアリズムの偉大な巨匠の一人であり、偉大な愛国者、国際主義者であった。彼のあらゆる思想的および文学創作の発展の道は中国における人民革命の発展ときりはなすことができない。⁽¹⁾』

魯迅は人民との直接のむすびつきが文学にとって決定的意味をもつことを知っていた中国の作家のうちの最初の人だった。魯迅の創作と活動の根底によこたわっている生活の真実は進歩的中国文学の標語になった。評論(雑文)は偉大な作家の最も強力な武器であった。魯迅が大胆で摘発的な雑文で述べたなかには彼の生々とした関心と注意をひかなかつたような中国の新らしい歴史における事件は何一つなかつたといふことができる。

魯迅の作品には一つの思想が赤い糸となつてとおつている。それは私有制の封建社会および資本主義社会は人間を生み出し踏みにじり、そのなかでよりよい志向や感情を弱めているといふことである。この人間を憎む社会では支配階級はにくむべきものだ。

魯迅は歴史的遺産に関する問題を新式に提出した最初の中国人のうちの一人であった。卓絶した文学の研究家、理論家および批評家の魯迅は、幾世紀にわたる祖国の歴史と文化をよく研究し、そのすぐれた進歩的な伝統を保存し発展させた。彼は中国の階級的散文および詩の巨匠たちの作品の真の鑑識家であり評価者であった。その研究と論文——「中国小説史略」「漢文学史綱」——で魯迅は過去の中国文学に深刻で正確な評価をあたえた。

魯迅の遺産は偉大であり、多面的である。それは、小説、社会評論、批評、研究、翻訳(1903年から1936年まで)を含む20巻よりなつている。⁽²⁾

(1) 馮雪峯、魯迅——中国の偉大な革命作家、「人民中国」、No.18—19、北京、1953、44頁。

(2) 魯迅全集20巻、「復社」1938。

小説集、散文詩、社会評論——、「呐喊」、「彷徨」、「野草」、「南腔北調集」「熱風」、「准風月談」、「三間集」その他で作者は文学的な賞讃をはくし、中国だけでなくはるか国境をこえて一般にみとられるにいたった。魯迅の文学作品、若干の社会評論はソヴェトの読者によく知られている。魯迅は熱烈な愛国者、中国人民の社会的良心の表現者としてわれわれの前に立ち現れている。

1. 魯迅の生涯および創作の道

魯迅は1881年に浙江省紹興県の町で周家に生れた。彼の父は教養ある人で母は素朴な田舎の家庭出身の婦人だった。作者のほんとうの姓名は周樹人である。魯迅はペンネームで、母の姓魯がそのもとになっている。魯迅というペンネームを使い始めたのは彼が中国文学に登場した第一番目の小説「狂人日記」の公表された1918年からである。

検閲の監視と警察の迫害で彼はおゝくのいろいろなペンネームで隠れることを余儀なくされた。彼はしばしばペンネームを変えたがその数は数十にもなった。

魯迅の幼いころ、彼の家は30畝から40畝（約2ヘクタール）の土地をもっていた、魯迅のみとめるところではこれは惨めでない生活をするには充分だった。しかし家庭生活の保障は長くはつゞかなかった。13才をすぎたとき、家庭には不幸がおこった。それは、家の支柱となっていた祖父が逮捕されたことだった。あらゆる財産が役人と看守への賄賂になった。それから魯迅の父が病気になった。後に魯迅はこの時期について書いている。

『四年以上も、わたくしはほとんど毎日、質屋と薬屋へ通わねばならなかった。いくつだったか年令は覚えていない。薬屋では陳列台に頭がやっとなどくだけで、質屋では勘定台がわたくしの背丈の2倍もあつてとゞかなかった。冷笑と侮蔑のうちに、わたくしは着物や頸飾りと引換えに金を受けとり、それから病気の父のために薬を買いにいった。家ではそのほかの仕事をしなければならなかった。

わたくしの父のかゝった医者名のある人だった。彼の薬の主な調剤はと

ても変つていたので、それを手に入れるのは大変むずかしかった。つまり、冬の蘆の根、三年霜のかゝった甘蔗、めすおす対の蟋蟀、実のついた平地木……などであったが、父の病気はますます重くなって死んでしまった。

いきなり困窮に陥ちこまねばならなかった者への世間の人々のほんとうの姿を、わたくしはこのときはじめて知つた。⁽¹⁾』

窮乏困窮は、子供に家郷を見捨て、或る親戚の家に移り住ませることになった。しかしこゝでも彼には恵まれた生活を見出すことができなかつた。

『……わたくしは親戚のところへ行つて住むように勧められた——と魯迅は書いている——そこで、わたくしは乞食といわれ、家へ戻る決心をした……家は次第に貧乏になり、わたくしに教育をあたえてくれる方法もなくなるまでになった。田舎では零落した知識人の子弟にはふつう二つの道があつた。それは個人の秘書又は商人の番頭になることであつた。しかしわたくしが欲しなかつたので、母は道中の用意にと、なにがしかの金を集めてくれ、官費の学校を見つめるようにといつてくれた。⁽²⁾』

真心と並々ならぬあたゝかさにみちた小説「孔乙己」で魯迅は痛ましくそして佻しい子供の時代を語つている。

『12年のあいだ、わたくしは「咸亨」という看板の酒屋で小僧をした。いまだにわたくしは覚えている、店の主人がわたくしに言つたことを。

『お前はなんというウスノロだ、長上衣を着た上等な常連には尻込みして喜ばそうともしないなんてさ。仕切の外よりも勘定台の外にいた方がお前はずっとました。

短い上衣を着た常連を扱うのは気軽だったが、彼らがむやみと碌でもないお喋りをするのにはいつもウンザリとさせられた。欺されないように用心して彼らは樽から錫の徳利に酒が一ぱいになるのをじかに自分で見ようとし、また徳利に水が入つていないかどうか予めしらべようとしたりした。彼らは徳利が熱湯の中に入るのをじつと見守り、それではじめて安心した。こういうしつこ

(1) 魯迅全集、モスクワ、1954、第1巻、55頁。

(2) 同 上 50頁。

い監視のもとでは、酒に水をわることはとてもむずかしかった。幾日かすると主人はわたくしがぼんやり者だからそういった仕事はできないと思つた。幸いにもわたくしには主人の近親の者の推薦があつたので、店から出されることもなく、酒を暖める仕事にまわされた。

それからというもの、わたくしは一日中スタンドのかげにいて、この退屈でつまらない仕事をする事になった。大失敗はやらかさなかつたが、単調と退屈でたまらなかつた。主人はいつもおっかない顔付をしていたし、お客さんも滅多に上気嫌ではなかつた。』

魯迅は官吏の榮進の道や商人の道を擲つための力を見出すことができた。彼は何世紀にもわたつて中国人民の自覺に毒をあたえるため「王宮まで上る」という儚ない夢をうえつけてきた「最大の煙幕」で自分をつゝむことをゆるさなかつた。⁽¹⁾

魯迅は学習への深い意向を経験した。これについて彼は何回となく自分の著作や自伝に書いた。「わたくしがNへ行つてK学堂にはいろいろと決心したのも、異なる道を行き、異なる土地へ逃れて、別種の人々と交りたいと考えたからだつたようだ。母は、しようことなしに、八円の旅費を工面してくれて、わたくしの好きなようにせよと言つた。だが母は泣いた。これは人情としてあたりまえであつた。なぜなら、そのころは経書を学んで官吏の試験を受けるのが、正当なコースであり、洋学を勉強するのは、世間の眼からすると、行き場所のなくなつた人間が魂を毛唐に売り渡したものと見られていて、それだけよけいにはずかしめられ、いやしめられるからであり、また、母は、自分の息子に会えなくなるからであつた。だがわたくしは、そんなことに構つていられず、とうとうNへ行つてK学堂に入学した。この学校でわたくしははじめて、世には物理や、数学や、地理や、歴史や、図画や、体操などの学料があることを知つた。生理学は習わなかつたが、わたくしたちは木版本の「全体新論」や「化学衛生論」などを目にすることができた。わたくしはいまでも覚えている、以前の医者⁽¹⁾の理窟や処方。いま知つたこととくらべてみて、次第にわたくしは、漢法

(1) 瞿秋白、魯迅雜感選集、吉林、1948年、171頁。

医は結局意識的あるいは無意識的な騙りに過ぎない、ということをとるようになった。そして同時に、騙られた病人と、その家族にたいして深い同情を抱くようになった。⁽¹⁾

18才のとき魯迅は南京の航海の学校に入学した、しかし半年で退学して路鉞学堂に転じた。こゝで青年は興味と熱心をもって自然科学や技術方面の知識を吸収している。まもなく魯迅は優れた学生のなかに入つて勉学をつづけるために日本へ派遣された。しかし、魯迅は日本で工学の方面での改革を断念し医学の研究をはじめた。

魯迅は医学専門学校に2年在学したゞけだった。

『わたくしの夢は——と魯迅は生涯のこの時期について書いている——とても美しいものだった。卒業して国に帰つたら、わたくしの父のように誤られている病人の苦しみを救つてやろう。戦争のときは軍医を志願しよう。そしてかたわら、国民の維新への信仰を促進させよう……』⁽²⁾

この時期の魯迅に、人民大衆への積極的影響の方法として文学をという考えが発生した。

魯迅は、ひろい大衆のなかに民族的自覚の思想をひろめることのできるような文学の発展が中国には必要であるという結論に達する。この結論は次のような出来事がもともなつた。

あるとき、魯迅は戦争のニュース幻燈を見た、そのなかで中国人が大勢の人々にとりかこまれていた。人々のうちにはたくさん彼の同国人がいた。その中国人は日本人にスパイの嫌疑をかけられ、他の中国人たちの見せしめに首をきられるところだった。

死刑のとき、そのばにいあわせた中国人が同じ中国人の運命に何の同情もあらわさず、中国人に加えられた残酷な処罰に冷淡であつたことが、彼を感じさせた。この情景は病気で死ぬことが中国人にとって最大の不幸ではないという考えに魯迅をみちびいた。後れた暗黒の人民には何よりもさきに民族意識を

(1) 魯迅選集、モスクワ、954、第1巻、55—56頁。

(2) 魯迅全集、第1巻「吶喊」序。

たかめることが必要である。文学は中国人民の覚醒と発展の助けになることを魯迅は知った。こうして彼は文学活動に一生をさへげることにした。

この事件の後、医学はもはやそれほど大きな事業ではないということ、つまり、人々が無智ならば、健康であり体格は屈強であろうとも、彼らは無自覚に死刑の対象となるか見物人たちの見世物にしかねれないと感じたからだだった。第一に必要なことは人民の精神的武装であった。しかも彼にとってよい方法は文学なのである。魯迅は医学専門学校をやめて、文学運動に入ることにした。

この一般的な無関心という環境のうちに、魯迅は意見を同じくする何人かを探し出し、必要な人々を自分のまわりに集めることに成功した、それらの人々と一しよに彼は「新生」という名の雑誌を発行することにした。

『しかし雑誌の発行期日が近づいたとき、——と魯迅は書いている——何人かの協力者がいなくなった、それと共にわれわれの資本も消えてしまった。しまいには一文なしの素寒貧がぜんぶで三人のこった。第1号の発行はおくれた。失敗について、われわれには何もいうことはなかった。間もなく三人もなげだしてしまい運命にかりたてられ、自由に未来について夢みることもできなくなった。これがわれわれの失敗し生れ出でることさえしなかった「新生」の終末だった。』⁽¹⁾

このような哀愁がわたくしを包んだことはいまだかつてなかった。わたくしにはそれがどこからきたものか、すぐには納得がゆかなかった。しかし後になってすべてがわかった。思想が賛成されれば、その支持者はますますもって前進し、反対者にあえば戦いへと勇みたつものだ。もし人びとへの呼びかけが反応もなく、抗議もなく、賛成もないとしたなら、あたかも涯しれぬ荒野に身をおいたように、どうしていゝかわからないのだ。これは何と悲しいことであろう。そこでわたくしは、自分の感じたものを寂寞と名づけた。この寂寞は一日一日成長していつて、大きな毒蛇のように、わたくしの魂にまつわりついて離れなかった。』⁽²⁾

魯迅はすでに1903年に文学への第一歩をふみだしている。彼は「浙江潮」

(1) 魯迅全集、第1巻「呐喊」自序

(2) 同上

のために論文を書いており、ユーリ・ベルンの「月界旅行」等を翻訳している。それにつゞく年代に彼は著名な漢字の歴史の専門家章太炎の指導で精力的に中国の文字学を研究し、翻訳や編集に従事した。まもなく魯迅の翻訳には「域外小説集」2集があらわれる。これはロシア作家の作品集である。

『わたくしは希望した——と魯迅は、わたくしはどうして小説を書くようになったか』という文章で強調している——文学作品の力で社会に影響を及ぼしたい……自分で書かうとはせず、外国文学とくに被圧迫人民の作品の翻訳と紹介にあらゆる注意をはらった……わたくしは戦いへとよびかける作品を求めた。この試みはわたくしを東欧の文学へみちびいた。⁽¹⁾』

魯迅の世界観と創作方法は何よりもまずその生活の影響のもとに骨格が固まり発展した。それらは作者をかこんでいる生活が変るとともに変つた。それとともに、魯迅がその作品中で中国の現実の典型的現象を真実に描くことに成功したのは、彼が時代の進歩的、革命的立場にたつたおかげである。

被圧迫人民の解放のための戦いを呼びかけようとする文学的試みは魯迅をプーシキン、レールモントフ、ゴーゴリ、ミツケヴィチ、ペテフィ等の作品へ近づけた。

1909年から1911年に魯迅は杭州と紹興で教育活動に従事し、清朝が倒れ革命政府が南京にできあがつてのち、教育部（文部省）に勤め、「謝承後漢書」を編纂し、「稽康集」を校合し、作者の故郷の歴史から集めた「会稽郡故書雜集」を出版し、仏典をも出版、金石拓本の蒐集、研究をする。

魯迅の文学活動は辛亥革命よりもまえに始つた、それは中国のブルジョアジーによって指導された革命運動のたかまりの時期であつた。はじめのうち、魯迅は革命を歓迎した、それは革命によって清朝とそれにむすびついた秩序を倒すばかりでなく、また社会生活の民主化をも期待したからだつた。

ヴェ・イ・レーニンが辛亥革命とむすびつけて書いた。『中国の自由は農民の民主主義と自由主義ブルジョアジーの同盟によって戦いはじめられた。プロレタリアートの党に指導されずに農民が自由主義者たちに抗して民主的地位

(1) 魯迅、第5巻、106—107頁。

を確立することが出来たろうか。自由主義者たちは右翼に投降するため都合のよい瞬間を待ちうけているのだ。近い将来がこれを示すだろう。⁽¹⁾』

辛亥革命は魯迅の期待にそわなかった、こうして彼には幻滅がよびおこされた。これはブルジョア民主主義革命だった。この革命は帝国主義勢力の圧力、自由主義ブルジョアジーの妥協、プロレタリアートの農民指導をかいたため、その前に立っている民主的任務を解決しなかった、こうして清朝をたおしただけにとどまつた。

『わたくしは——と魯迅は追想している——辛亥革命と第2革命——袁世凱が皇帝を僭称するのを、張勳の復辟を見た。これらを見てわたくしは懐疑的になり、幻滅と落胆がわたくしをとらえた。』

革命は中国人民が幾世紀にわたって望んできた自由をもたらさず、その悲惨な運命を軽くすることもしなかったし、外国の圧迫から解放することもしなかった。

『革命家たちが——と魯迅は未荘の農民の口を借りて語っている——町を占領はしたけれども何も重大な変化は起らなかった、県の知事はもとのまま居坐り、たゞ官名が変つたゞけ……部隊を指揮するものはもとの軍人だった。』

魯迅の追想と小説は次のような主要テーマについて語っている。それは1911年の辛亥革命後1918年までの作者の注意の中心となった中国の運命の問題、中国革命の道の問題、中国人民のほんとうの解放の問題である。1918年に、偉大な10月社会主義革命の直接影響のもとに、中国に新しい革命のたかまりがはっきりあらわれた時に、作者の思想及び文学作品には、魯迅の革命闘争の新しい段階のはじまりを特徴づける著しい変化があらわれる。

瞿秋白は魯迅の創作と世界観を分析して1933年にこう書いている。

「魯迅は進化論から階級闘争の理論への道をあゆんだ。⁽²⁾紳士階級の異端者からプロレタリアートと働らく人民の真の友人および戦士になった。4分の1世紀のたゞかひの後に……彼は貴重な革命的伝統を新しい陣営にもちこんだ

(1) レーニン全集、第18巻、372頁

(2) ふるい封建社会の中国の「貴族的な」階層

それは作者の苦しい試煉と深刻な観察の結果生れたものである。⁽¹⁾

魯迅の創作の道はマルクス・レーニン主義思想への漸進的接近をしめしている。早期の魯迅は、漸進的進歩の方法で社会は暗黒から光明へ向わねばならないし、古いものをうちこわし光ある健康な世界をつくれるものと信じていた。

魯迅はブルジョア文明の腐朽と偽善を見た。しかし、彼はその社会的根源と原因をはっきりと示すことを充分にしていない。資本主義が歴史的に破滅の運命にあることもよくわからなかつたし、社会生活の根本的改造の必須なことと不可避なことについての革命的な結論に達することができなかつた。こゝに解放のためにたゞかう人民の革命闘争における労働者階級の歴史的役割をまだ理解していなかつた当時の魯迅の見解の狭さと世界観の限界が語られている。

『その当時の中国の一般的後進性から出発して——と馮雪峯は書いている——魯迅は人民の思想啓蒙、人民の精神解放のしごとからはじめねばならないと考えた。つまり「個性の解放」「民族性」の改造からはじめねばならないと考えたのである。個々の人間が「つよい個性」をもっている人民だけが、革命闘争をおこし革命を勝利にみちびくことができる、こう彼は考えた。⁽²⁾』

国内における反動的支配という条件では「個性の解放」のたゞかいは、現実の自由をもたらすことはできなかつたであろう。しかし、魯迅は、中国人民は何よりもさきに「精神的に」解放されねばならない、したがって、人民の啓蒙は革命家の最も重要な任務の一つだとみなしたのである。

後年、社会発展の法則を研究し、歴史唯物論を知つたために、魯迅にはどんな階級が反動とともに滅びさり、どのような階級に勝利が属するかが明らかになった。

それ以前、魯迅はふるい社会の腐敗をみて、「新らしい」社会のくることを夢想した、しかし、この「新らしいもの」がどういうものであるか知らなかつたし、それがよいものであるかどうかもわからなかつた。「10月革命の後にはじ

(1) 瞿秋白、魯迅雜感選集序文

(2) 馮雪峯、魯迅——中国の偉大な革命作家「人民中国」18—19号、北京、1953年、47頁

めて、新らしい社会をつくるものがプロレタリアートであることを知つた…』⁽¹⁾

こうして、魯迅は、満洲人の圧迫から漢人の解放をたゞかいとろうとした革命的民主主義者から、『将来は擡頭しつゝあるプロレタリアートのものである』⁽²⁾ということばに深く確信されているように、断乎として社会主義の擁護者への道をあゆんだのだった。魯迅の創作は20世紀のはじめ以来の中国社会に発生した社会的変化を反映している。

魯迅が生きていたのは19世紀のおわりと20世紀の30年代だった、そのとき中国は半封建、半殖民地国家であり、国家の利益は帝国主義の掠奪者たちによって乱暴無残にもふみにじられていた。これは国内での人民の大動乱と革命的事件の時代であり、のちの全人民の運命に大きな影響をあたえた。中国は世界の帝国主義の連合勢力と、中世的な野蛮と圧迫をもつ国内の封建的、軍事的反動に抗してきびしいがそれぞれ異つたたゞかいを同時に行わねばならなかつた。魯迅の創作生活のはじめは、殖民地および従属国の解放革命の到来した時期、これらの国々のプロレタリアートのめざめた時、革命における彼らの指導的役割の時代にあたっていた。

魯迅にとつて1919年の「5・4」までは個人主義擁護の見解が特徴であつた。うたがいもなく、この時代の魯迅の世界観は具体的な歴史的理由によって条件づけられていた。

当時の中国では、労働者階級がまだ弱くて政治的力を自覚せず、農村では農民大衆が自然発生的な闘争しかできなかつた。魯迅は『保守的傾向の町人と追隨的な大衆の大部分は奴隷制度の保護者であり、事実上、改革と前進運動をはぐんでいる』⁽³⁾ことを見た。

魯迅はその頃まだ社会発展の法則に関する科学的知識で武装されていなかつた、そして社会の発展をとめる封建文化の枷に抗して決然としてたゞかうことの必要性が暗示されているだけの個人的経験をよりどころとしていたことが

(1) 魯迅、第5巻、25頁

(2) 同上、第4巻、198頁

(3) 同上、第5巻、25頁

しばしばであった。したがって、魯迅は個性教育、個性解放をよびかけ、利己的個人主義とのたゝかいをよびかけた。

ほんとうの意味で、魯迅の文学戦線での活躍は1919年の「5・4」運動の前夜にはじまった。1918年、革命的民主的傾向の「新青年」誌上に、大成功をおさめた魯迅のはじめての短篇「狂人日記」がのせられた。

「5・4」運動の時期に、魯迅は革命的民主主義者としてあらわれ、その文学作品と政論的作品で敵にたいして容赦ない徹底した戦士であることをしめした。それ以後、魯迅は民主主義と革命文学に確信をもち反動勢力とのたゝかいにおける非妥協性をつよめ、彼の活動をますます徹底的なものにした。魯迅は「全体としての社会の構造」を見ることができたし、プロレタリアートの解放の役割のあらゆる重要性をしり、また新しい革命の陣営に来ることができた。

『わたくしはこう考える——と魯迅は書いている——問題の根本は人自身にある……もし彼がほんとうの革命家ならば、何について書こうと、どんな形式で書こうと、その創作は革命的であるだろう。泉から流れでるのは水であり静脈から流れでるのは血である。』⁽¹⁾

1923年に魯迅は「呐喊」「彷徨」という名の短篇集を出版した。このなかには1918年から1922年の間に書かれた「狂人日記」、¹「阿Q正伝」、¹「孔乙己」、¹「薬」、¹「故郷」、¹「小さな出来ごと」、¹「端午節」その他の広く有名になった作品が収められている。中国の文学生活上大きな事件となった「呐喊」が世にあらわれたことは、中国の新らしいリアリズム文学のもといをさだめた人として魯迅の確信をつよめた。「呐喊」で魯迅は人間を奴隷とし、「陰気な忌わしい事」無知偏見にみちた封建的世界のきびしい暴露者としてあらわれている。それとともにこの短篇集には、ふるい中国の圧迫されている人びとや働らく農民の苦しい運命にたいする魯迅の深い同情が、大きな芸術的力をもって反映されている。

「進化論から階級闘争の理論へ、個人の解放のたゝかいから世界を改造す

(1) 迅魯、第3巻、525頁

る戦闘的集体主義⁽¹⁾への魯迅の道は個人のたゞかひの経験をとおしてあらわれた。これは倦むことをしらない内的矛盾の創作の道であり、深い思索の道であり、あらゆるものにうち勝つマルクス・レーニン主義思想の摂取の道であった。魯迅はこの道を1924—1927年の革命をとおして歩み、その後につゞく年はすべて革命闘争であった。尖鋭な階級闘争が魯迅の世界観の形成を促がし、彼があたらしい美学をつくるたすけになった。

1926年、南方での中国革命のたかまりの時期に、魯迅は反動権力の迫害によって北京から南へゆき、そこで第二の短篇集「彷徨」を出版した、これには1924—1925年に書かれた短篇がおさめられている。「呐喊」でのように、「彷徨」でも魯迅は中国の現実を真実に描写することをつゞけ、魯迅は憎むべき封建主義と反動勢力の社会悪と果敢にたゞかう暴露者としてあらわれた。魯迅のこれらの短篇をひらくと、読者の前には中国社会のさまざまな代表者たちの肖像画の画廊がくりひろげられる。

「祝福」の女主人公——祥林嫂——は実直で忍従的な勤労者である、中国農村の何百万という女とおなじように、彼女たちは日々の一粒の米のためにたえまない苦しいたゞかひをしている。祥林嫂を主人は年をとって役に立たないように思い、彼女が家庭の奴隷として一生働らいた魯家から追いだしてしまう。彼女は餓えと乞食の苦しい運命をになうことになる。「居酒屋にて」の主人公呂緯甫という人物には、きびしい現実、ふるい世界の忘わしいことどもが彼を受身、無関心にさせ、自分の力に自信をうしなわせ、生活への力と関心をうしなってしまった人間がしめされている。「幸福な家庭」、「石鱈」、「孤独者」で、魯迅は社会的階層や性格によるいろいろな人びとのはっきりとした忘れがたい肖像を創造している、だが彼らは一つの運命、憫れで不倖せで従属的な運命をもっている。魯迅はすぐれた手腕と説得性をもって、封建中国の病的社会のイケニエになっている人びとの悲劇的運命をあばいている。しかし、無知とたちおくれを生みだし、人間生活をかたわにする封建社会を暴露したとき、魯迅は

(1) 瞿秋白、魯迅雜感選集序言「東北品店」1946年、309頁

とくに早期の作品で、人民の健康な力をはつきりと反映するには不十分だったし、農村の革命的力を過少評価している。これらによってあきらかにしなければならないことは、早期の魯迅の小説では積極的な力や積極的主人公がきわめて弱く示されているということである。

この時期に魯迅は、進化論の立場にとゞまりながら、「個性の解放」の思想を信じつゞけている。魯迅の考えによると、ふるいものが新しいものに代り、社会の進歩をみちびかねばならない、たとえ新しいものについてはつきりしたことはまだ書いてはいなかったにしても。『魯迅は——馮雪峯は書いている——「個性の解放」の思想がまだのこっているにしても、マルクス・レーニン主義者に近かった。自分の作品のなかで、彼は人民を圧迫している社会の暗黒勢力を暴露しうちくだいた、そしてブルジョア右翼と断乎としてたゞかった。「民族性」の弱点の原因を分析して魯迅はつぎの結論にたつた、つまりその根源は中国の封建社会と封建イデオロギイにある。⁽¹⁾』

魯迅はその頃まだマルクス・レーニン主義の立場、プロレタリア革命の立場にたつてはいなかったけれども、すでに封建主義とそれによつて生みだされた反動的なイデオロギイにたいする和解しがたい戦士としてあらわれた。魯迅のこのたゞかいは全体として新民主主義革命の任務と目的にこたえたものであり、中国人民の社会的、民族的解放の事業にこたえたものであった。

1924—1927年の革命の時期に、魯迅はまず第一に進歩的教授と学生たちをみつけだした。反動がブラックリストにのせて魯迅をとくに監視したにもかゝらず、魯迅はたしかな場所にかくれて勇敢にたゞかいつゞけた。後に彼は厦門におもむき、さらに当時の革命の中心地の一つ広東に移つた。こゝで魯迅は中山大学文学部の学部長に任命され、中国文学史を講義した。これが魯迅の緊張した組織的教育活動のときだった。彼は創作力と革命の勝利の確信にみちていた。1921年の「故郷」で魯迅がいった予言が実現しはじめた。

『希望はすでにあるものだともいえないが、またないともいえない。それは

(1) 馮雪峯、魯迅——中国の偉大な革命作家「人民中国」第18—19号、北京、1953年、49頁

地面のようなもので本来道はない。しかし歩く人が多くなると道になるのだ。』

1927年に魯迅のあたらしい文集「野草」が出版された。これは有名な進歩的雑誌「語絲」に以前発表された散文詩があつめられたものである。「野草」は著者が『これは多く刹那的な印象にすぎない』とつゞましく述べているけれども、「彷徨」とおなじく中国文学の創作のうえで重要なできごとである。高い文学的価値をもち、ひろく社会的に知られている「野草」で、魯迅は敏感で雄眼な芸術家の観察、人民の現在と将来の思想や思考を読者と分ちあい、火のようにげんげしい言葉で無知と沈滞、偽善と卑怯をあばきだし、深い透徹さをもつて人間の高められた志向、人間の精神的高潔さ、人間の思想と希望の世界についてもの語っている。

ブルジョアジーの裏切りにより革命が一時的に敗北し、国内的にも、世界的舞台においても階級的力の対比関係が革命にとって不利なときに、蔣介石がまったく反革命的叛逆をしたとき、魯迅は進歩的學生たちにたいする抑圧への抗議として広東大学の職を辞して上海へもどった。そこで彼は死ぬまで、困難ではあったが、崇高なたくかいをつづけたのである。

許寿裳教授は魯迅について書いている。『彼は夜を日についで働らいた。がつねに、彼を攻撃する誰かゝいた、そして彼はそれからのがねばならなかった。政府と人民、友人と社会が何かの助けをしたことはほとんどなかった。彼の運命にふりかゝったすべてのもの、それは、圧迫、非難、強要とたえまない逮捕の威嚇だった。彼はきよらかな水をもった水槽ともいふべきだった。多くのものがこの水槽から水をくんだ、しかしそれに水をはこんでくる泉はなかった。こうして水槽はからっぽになった。原稿料だけが魯迅の生きてゆくのをさゝえた。この金で彼は家族を養い、惜みなく友人をたすけ、本を出版した。彼の著作を出版して儲けている出版所から稿料や印税をうけとるのはたやすいことではなかった。彼は休みなく働かねばならなかった。こうした彼には健康や療養のための時間もなければ方法もなかつた。』⁽¹⁾

(1) 許寿裳、亡友魯迅印象記、魯迅選集、モスクワ国立出版所、1945年、194—198頁

上海時代の魯迅の活動は、文学創作のあたらしい力と、社会生活への積極的参加によって特徴づけられている。まさに上海時代に、魯迅は中国共産党と緊密にむすびつき、コミュニストによって指導されたいろいろな政治的政策に活動的に参加することをうけいれている。これらの年代に、魯迅はけんめいにマルクス・レーニン主義理論の研究にしたがい、翻訳やマルクス・レーニン主義にしたがった宣伝活動をつづけている。上海で魯迅は文芸雑誌「奔流」をつくり、1930年3月左翼作家連盟の組織者の一人として参加し、1936年それが解散するまで指導者であった。上海時代にはかゞやかしい政論（雑文）が書かれた。これらはまぎれもなく革命的な非妥協性と目的性によってつらぬかれている。戦闘的な政論、これには次のような文集がある。「而已集」（1930年）、「三間集」（1932年）、「偽自由書」（1933年）、「南腔北調集」（1934年）、「准風月談」など。これらの雑文集で、魯迅は燃えるような愛国者としてあらわれている。彼にとって、中国の働らく人々の利益は周囲の生活の事件やことがらを評価する最高の原則であり、標準であり、反動勢力、民族を裏切る国民党の政策、封建思想や帝国主義侵略、「病的社会」の醜いことがらや悪にたいするきびしい暴露者であった。

魯迅は輝かしい政論家であった。彼の手には恐るべき武器としての政論があった。中国の政治生活のあらゆる重要な事件を、魯迅は自分の解説的な政論のことばで反映させた。彼の評論はおそれられた。魯迅のことばには何百万の人びとが耳を傾けた。

1936年に出版された魯迅の「故事新編」は上海時代のものである。これは八篇からなり、その多くは1934—1935年に書かれ、中国のむかし話からいろいろなテーマをとったものである。これらの短篇の基礎には、中国人民にひろく流布されている史実、伝説、神話が素材としてとりいれられている。しかし、魯迅はこれらの素材を文学的に処理したわけではない、リアリスト作家としての魯迅はそれらを現実の象徴的表現のために、文学的にすぐれた巨匠の手腕をもって利用し、古代中国を現代の光りにあて、独創的に解釈した。これらの短篇で魯迅は鋭い社会的志向性をもった作品をつくるために、諷諭の方法を用い

諷刺的ジャンルのたぐいない巨匠としてあらわれている。

魯迅は1936年10月19日に死んだ。反動勢力と暗黒に追われながら、彼は帝国主義の侵略に反対し、軍国主義と裏切りもの、国民党の政治に反抗してたゝかった。魯迅の生涯は、いかに自国の人民につかえるかについての輝かしい模範である。

月刊文学雑誌「作家」は1936年に編集者の論文で次のように魯迅を特徴づけている。

『魯迅は最も偉大な進歩的作家であるばかりでなく、民族の自由と解放のために断乎としてたゝかった最も勇敢な戦士である。彼の一つ一つのことばや文章は、アッピールであり、暴露であり、急襲である。すべて魯迅の創作は血と涙でみたされたたゝかいの歴史⁽¹⁾ということができる。』

魯迅の大きな文学遺産には、革命にたいする全面的確信のないようなページはない。

2. 現代中国文学およびそのリアリズムの方法のもとをさだめた魯迅

魯迅はその作品で中国の半殖民地、半封建的機構の驚くべき不正に反抗している。中国では貧窮が圧倒的多数の宿命であり、わずか一かたまりに、物質的、精神的生活の恩沢をうける権利が無制限に属していた。

『わたくしの創作の材料に——と魯迅はその雑文「わたくしはどのようにして小説を書くようになったか」で書いている——主として病的社会の不倅な人びとの運命から借りた、それを研究しそれを治療するよう注意をむけることを目的とした……わたくしは小説の力で社会に影響をあたえたかった。』魯迅の功績は、彼が、文学を生活、人民に近づけ、文学を進歩の力強い武器として、現在のことながらに奉仕させたことにある。偉大なすべての芸術家のように、彼も自分の任務がたゝかいとそれなしには将来もないような現在の獲得にあることをよく知っていたことである。

(1) 「作家」魯迅記念特集号、第2巻、第2冊、1頁

生活そのものは革命の現実を反映するリアリズム文学をもとめている、そして中国の作家や詩人たちがそれを創りはじめた、その先頭には創作および社会的活動のはじめから魯迅がいた。

魯迅は熱烈に生活に学ぶことをよびかけた。彼は芸術家の誠意と現実の深刻な反映に、人民の精神的生活をうちひらくことに、創作の基礎を見た。魯迅のリアリズムは反動勢力の支配と暴政にたいする自覚した政治闘争と緊密にむすびついていた。

「万里の長城」によって人民の生活とたゞかいから隔てられていた文学に、魯迅は新しい、いまゞでに知られなかった考えと形象の世界をひき入れた。

魯迅がその生涯の長年月を研究にさゞげた中国文学の素晴らしい知識は、魯迅に文学言語の偉大な中国の巨匠たちのすぐれた創作によって示されている幾世紀にもわたる豊富な文学作品の優秀なリアリズムの伝統を研究することを可能にした。魯迅の功績は、古典的および批判的リアリズムの伝統の先駆者たちによってつくられたものをひらき受けついただけでなく、それらを自分の創作のうちに発展させ、愛国主義と革命思想でつらぬかれた戦闘的リアリズムの方法をその文学創作の過程のうちにつくることができたことにある。

魯迅の小説と文学批評的創作のあきらかな社会的色彩、搾取する「上層のもの」への深い憎しみと奴隷化された「下層のもの」の運命にたいする真心からの共感と同情とは、魯迅の人民の生活との深いむすびつき、原則的に現実の活動への彼の新しい関係を証明している。これは魯迅を他のすべての中国における先駆者と根本的に区別するものである。

魯迅はロシアの文学作品、ロシアの批判的リアリズムの最も傑出した代表者たちを誰よりもよく知っていた。これは彼の創作に反映されないわけにはゆかない。

『わたくしは外国作家の作品——と魯迅は書いている——とくに、ロシア、ポーランド、小バルカン諸国の作品を読んだ。それによってわたくしは世界にはわが国の勤労大衆のような運命をもった多くの人びとがいること、大声をあげたゞかっている作家たちのいることを知った。そういう光景をわたくしはわ

れわれの村で見た、いまそれは、前よりもずっとはつきりわたくしの意識にあらわれた……こうして、わたくしは小説の形式で、社会の上層といわれているもの、⁽¹⁾衰亡と社会の下層のもの、不幸な状態を示そうとしはじめた。」

魯迅の創作で、基本的功績となるものは、中国社会の最も否定的側面のリアリスティックな描出である。「卑しめられ凌かしめられたもの」の形象を描くことによつて、魯迅は読者に中国と中国人民の運命をまじめに考えさせた。彼は中国の国家機構の体制そのものが社会的不平等の根源であることを確信させる。社会悪の最も鋭い批判であるリアリズム、これが魯迅の創作のうちで最も貴い性質である。彼は発展過程の経験を観察した現実のうちに、人間、社会関係、時代、世態、環境を見たしまた理解した。

魯迅の絶大な功績は、彼が筆をもって地主勢力と国民党独裁とたたかっただけでなく、この牢獄めいた制度の打倒を人民に呼びかけたことにある。魯迅はつねに解放をたゝかいとる中国人民の前線に立つており、このたゝかひに最も直接かつ積極的に参加することをしつていた。後年の戦闘的リアリズムは彼の小説および政論的活動で、主要かつ積極的な力となった。彼の創作のリアリスティックな原則は彼を弁証法的唯物論の立場につよめて、このすぐれた文学者戦士をプロレタリア革命の陣営にみちびいたし、後には魯迅のたゆみない運動をたすけた。魯迅は文学者の鋭い眼でまわりを見た、そして到るところで彼と衝突せねばならなかった俗悪、残酷および社会的不正を容赦なく暴露した。1918年4月発表された「狂人日記」で、魯迅は封建社会の人を喰う風習と孔教道徳の反動的本質を暴露した。

『わたくしは歴史の本をひもといた——この小説には書いてある——それには日付がない、こゝにはどの頁にもまがりくねつて、こう書いてある、「仁義、道徳」。眠ろうと努めたが空しく、夜半まで注意ぶかく読んでみた。がとうとう、どの本の行の間にも人を喰うしという言葉だけが埋まつていた。』⁽²⁾

この短篇で魯迅は当時の中国を支配していた封建秩序に人殺しの特徴をあ

(1) 魯迅、第7巻、818—819頁

(2) 魯迅全集、第1巻、281頁

たえた。

『今日のはじめてわかった、4千年にわたって人が人を喰つてきたところに、おれも長年生きてきたことが……』

子供を救え……⁽¹⁾』

魯迅のこのはじめての小説には、彼の以後のすべての創作にとつてだけでなく他の進歩的作家たちの創作にとつても特徴となる特異性が見うけられる。これは何よりもまず、現代社会機構、人を喰う秩序、強力で残酷な支配、新しい健康な関係の発展を束縛し、その時代とその硬化した伝統の命数がつきようとしている階級のほんとのすがたをあらわにしているすべてのものへの批判的關係である。

一方では、魯迅のみとめていているように、ゴゴリの「狂人日記」の影響のもとに、他方では作者の縁者のうちの精神病者の印象から書かれた「狂人日記」⁽²⁾によつて、中国文学の歴史に新しい頁をひらいた。幾世紀ものあいだはじめて作者はお高くとまらず、平等に人民の代表として、非常な感動をもつて、社会的抗議の巨大な力をもつて、人民と話しはじめた。彼は思想や感情を、人民に遠く理解できない昔からのきまり文句で表現せず、生き生きとし高くひびくほんとうの人民の言葉で表現した。古ぼけた孔教のドグマの雰囲気⁽³⁾が幾世紀も支配してきた中国の文学に爽やかな革新の風が吹きはじめた。

『この小説は——と馮雪峯が指摘している——話言葉で書かれた、そして封建的中国の後れた側面ふるい習慣や見方を手酷くあばき非難した。内容からも形式からも、この小説は中国文学ではまったく新しい現象である。これは思想と文化の革命を呼びかける新しい中国文学の最初の作品であつた。』⁽³⁾

「狂人日記」は二つの中国の存在を明確に証言している。つまり、昔ながらの奴役を課された人民の中国、もう一つは、あらゆる新しい進歩的なもの彼らの特権を脅かすあらゆるものにたいして狂暴なたゞかいを行つている地主

(1) 魯迅全集、第1巻、291頁

(2) 周遐寿、魯迅の故家、上海

(3) 馮雪峯、魯迅——中国の偉大な革命作家「人民中国」第18—19号、北京、1953年、48頁

貴族とその手先たちの中国である。中国の反動家や極端な反動主義者たちは、魯迅を敵と見なし、彼の側に人民がいることを見て、彼にたいして狂暴なたゝかいをいどんだ。

魯迅は親しい友章素園あての手紙に書いている。『中国では人間であることがむずかしい……それにもかゝわらず、生きているかぎりわたくしは文学をまもるために全力をつくそうと思います。誰が塵埃に投げすてられ、煙のように吹きはらわれるか、新らしい文学か、それとも抑圧者の保護のもとにある腐つたふるい文学か』⁽¹⁾

「狂人日記」には封建的権力者の圧迫のもとにある中国人民の悲しい運命にたいする魯迅の考えがあらわされている。このはじめての作品にはすでに、思想的深みがあり、思索のゆたかな短篇小説の巨匠としての魯迅の明らかな創作上の個性がはっきりとあらわれている。

「狂人日記」は中国文学史のうえではじめて、社会変革をつよく要望する新らしい思想と現実のリアリスチックな再製の有機的綜合としてあらわれた。

ほとんど20年魯迅はふるい世界に抗してねばりつよいたゝかいを行い、敵の悪意にみちた非難攻撃や威嚇を撃退しながら、毅然として勇敢に前進しつづけた。反動は誹謗しようとして百方手をつくし終生彼をおいかけた。だが、彼にうちかつことはどうしてもできなかつた。『わたくしは生きねばならない——魯迅は声明した——もしこの世に生きたいとのぞむ人びとがのこっているならば、彼らは敢えて言い、笑い、泣き、怒り、罵りそしてたゝかわねばならない、この空間からこの呪うべき時代を掃ききよめるために。』⁽²⁾

魯迅は封建論者、軍国主義者や地主、社会的不平等と不法から中国人民を解放することのできる新らしい力の創造を呼びかけた。

『すでに時は来た——魯迅は書いている——假面を剥ぎとり、真実に深刻にそして大胆に人間の生活その血と肉体を描く時が。いまや、新らしい文学と断乎とした勇敢な戦士がわれわれには必要である。』⁽³⁾

(1) 魯迅選集，国立文学出版所，モスクワ，1945年，177頁

(2) 魯迅，第3巻，49頁

(3) 魯迅，第1巻，222頁

現実への忠実、生活の敘述の真実、文学の人民性は、社会生活の主要現象の分析過程で作者の基本的標準であった。「阿Q正伝」、「孔乙己」、「藥」、「小さい出来事」のような作品で、読者は昔の中国の小説で描かれた不可思議な話や妖怪変化でなく、読者それぞれの体験に近いふつうの人びとの生活を満足をもって見出した。素朴で虐げられた人びとへの心をひきつける直接性、人間性と愛情、その苦しい生活への滲みとおるような同情、これが魯迅のリアリスティックな創作の特徴である。

魯迅の小説が出版された最初の日から、読者の全般的な注意をひき、並なみならぬ関心をひきおこした。批評家は一致して、中国文学に革新者——働らく人民の苦しい生活の歌い手、深刻で尖鋭な人民の言語の名手があらわれたことを認めた。

「狂人日記」の後まもなく、魯迅はその後「吶喊」に収められた最も有名な小説のうちの一つ「孔乙己」（1919年3月）を創作した。主人公の名前をつけられたこの小説では、ふるいインテリ階級の没落した代表者の惨めな運命、封建的暴政のギセイ、滑稽で誰にも必要のない失敗者の中世的なふるい生活の下らないことのギセイになったことが描かれている。読者の前をよぎるものは傷痕や搔き傷のあとだらけで白いひげはうす汚い、蒼白の顔に皺の額のやつれた姿である。孔乙己の長い上衣はとても汚くてボロだった、まるでまる10年洗濯もしなければ補いもしないように。孔乙己は昔の中世の孔教の本からとった難しい判りにくい言葉を自分の話のなかにふんだんに混ぜた。まわりのものには彼のいうことの半分さえわからなかった。孔乙己は勉強したが試験には失敗したし、賄賂に使う金も学位を買う金も、収入の多い地位をうる金も彼にはなかった。貧乏が彼を乞食までさせ、窃盗の道へ押しやった。

ある時、彼は丁家へコツソリ忍びこもうとして、見付けられ、手酷くたゞきのめされた。彼は両脚をへし折られて外へ放り出された。

いまや彼は歩くことができず這うよりほかなかった。しかし、人びとはあいかかわらず彼を嘲笑しつゞけた。

こうして、秋の寒い夜、孔乙己は物笑いにされ、卑しめられ不具にされな

から、餓え死んだ。

「魯迅伝」の著者王士菁⁽¹⁾は次のように述べている。孔乙己の顔に魯迅はふ
るい知識階級の代表者を描いた、中国では彼らの前には二つの道がひらかれて
いる、すなわち、この小説で丁挙人に示されている幸福と権力への道と人間を
嘲弄と侮辱の対象にする落ちぶれた貧乏への道とである。第一の道は人間を人
喰いに転化させる道であり、第二の道は人間を人に喰われるものに転化させる
道である。孔乙己は他の人びとの物笑いの種になるとき、他の役目がないよう
に思われた。しかし、彼がどんなに無抵抗であろうと、彼には人間が憎しむ社
会で生きながらえることはできなかつた。

孔乙己はあまりに踏みつけられ、助けてくれる人もなく貧窮だったので、
自分のため自分と同じような人びとのため反抗し抵抗しようという考えも頭
には浮ばなかつた。しかし読者は孔乙己がどんなに自分の運命を脅かされている
かそれだけの耐えがたい生活を感じ、読者はその変革を待つ、この変革はや
って来ないことはできない。

1919年4月に書かれた「薬」で、魯迅は大きな芸術的説得性をもって、封
建イデオロギーの支配環境にある中国人民の深い精神的奴隷化の様相を創造し
た、この背景で国内に目ざめた新らしい革命的力を示しながら。読者の前を虐
げられた暗い人びと——小店の主人華大栓、その妻その他の人たちがよぎり去
る、彼らは無智のため肺病の息子を治療するのに人間の血がいゝと信じている
……小説では人だかりの多い市場の光景が乏しいが表現力にとむ方法で描かれ
ている、そこでは死刑執行人の康大叔が大声に自慢しながら銃殺された若い革
命家夏瑜の生血を売っている。夏瑜は死ぬまで不屈であり、彼の祖国——中国
——は全人民のものでなければならないといて死んでいった。

1921年に出版された「阿Q正伝」⁽²⁾——その最もすぐれた作品——で、魯迅
は辛亥革命を背景にしておきた事件を表現している。中国農村の生きた例とな
る未荘で、魯迅は農村の崩壊過程、農民の饑餓と貧困、搾取と圧迫の耐えがた
い情況、官吏と土地の貴族の横暴を真実に明確に示した。それらすべては全体

(1) 王士菁、魯迅伝、「新智書店」出版、上海、1948、85頁

(2) 魯迅選集、国立出版所、モスクワ、1952年、57頁

として社会体制の衰微を特徴づけている。

この小説は何よりもまず、辛亥革命というブルジョア民主主義革命へのきびしい諷刺である、この革命は『……当時まだ共産党がなく当時のプロレタリアートが革命に自覚的に参加することをしらなかったため流産した。⁽¹⁾』

阿Qは幾世紀にもわたる伝統と、彼をみすぼらしく憫むべき存在たらしめる封建社会の病気をもった男である。

阿Qはふるい中国社会の典型的代表のうちの生きた形象であり、僻遠の農村の宿なし日傭農夫で、一般の嘲笑い、さげすみ、非人間的搾取の対象になっていた。

阿Q、孔乙己や彼らに似た人びとの笑うべく痛ましい役割、困惑、悲しみと涙を理解しまた伝えることのできた中国の作家は多くはない。この形象で魯迅は社会の最下層にある人びとに異常にするどい心理的分析をあたえた。人間がこのように頹廃させられ、このように個性がさげすまれることをゆるす社会にたいして憫みと恥かしさに押しつぶされる思いのしない読者はいないだろう。

阿Qの形象に多くの論文をさげした作家張天翼は、中国におけるふるい孔教文化という点から考えて魯迅の作品を「未荘の文化と生活にたいするすべての批判」としてみている。

『阿Q——と張天翼は書いている——これは辛亥革命時代の農村の浮浪人の典型であるだけではない。彼は1911年の後でもまったく可能である。阿Qは他の社会階層にも可能である。』

『誰も非難しないものはいない——と張天翼は他の論文で自分の思想を發展させている——君たちの見解は自身によってつくられた、それらは決して君ら自身の財産をあらわすものではない。こうして、未荘の文化がお前を教育した。それがお前をつくり、お前に影響をあたえ、それに固有の見方を滲みこませ、弁髪をきった人びとを憎み、革命党を憎み、外出する女が他の男と話をすのを侮辱的な言葉で辱かしめることを教えこんだ。おまえ阿Qにとって、何

(1) 毛沢東選集，中国革命と中国共産党，外交出版社，モスクワ，1953年，第3巻，170頁

故あたらしいものが何でも異端であり、新らしいものへの憎しみが「正統」であるかは議論の余地がなかった。これについては趙旦那にたずねる必要がある……未荘の文化、これは趙旦那の文化なのだから。それはこれらの主人に、修道院での神話のように、大きな利益をもたらす……これらの主人がそれを文化の揺籃にかえ、この揺籃のなかでおまえ阿Qを育てている……おまえは趙旦那の未荘文化に入り込み、とうとうしまいにはその犠牲になった⁽¹⁾』

小説の主人公の姓と出生地は、他の同じもののように、彼の過去と同じくわからない。この男には名前がない。阿Qがその生活の大部分をすごした未荘の住民は彼の過去には何の関心ももたなかった。阿Q自身できえ、それについては話さなかった、それというのは、彼自身でも自分の過去がはっきりしなかったにめらしい。

阿Qには家庭がなかった——彼は自分を養うことさえ怪しかったのである。彼にはじぶんの住家がなくその土地の寺の「土穀祠」に住まねばならなかった。阿Qにはきまった職がなく、雇われてその日その日の仕事をしていた。彼は小麦を刈り、米を磨いだり搗いだりして、いろいろな仕事に従事した。よばれると、彼は傭つてくれる主人の家に寝起きした。

彼の手を借りねばならないときだけ、人びとは阿Qを思い出し、仕事が終つてしまうと忽ち彼のことは忘れ去つた。誰も彼に関心をもつものはいなかった。彼の生活はまるきり敗北だった。しかし彼はつねに勝利者をもって自任していた、彼自身を「精神の勝利」をもって欺きながら。

餓えのために阿Qは自分の村を捨て、生計を立てに都会へ出ていった。半年たってから、彼は突然未荘へもどってきた。

「ところで、見たことがあるかい、どんな風にして頭をバツサリと切るか？」——阿Qはたずねた。——そりあスバラシイぞ！革命党を殺したんだ……素的だぜ！——彼は頭をゆすって前に立っていた趙司農の額にペッと唾を吐きかけた。これを聞いたものは慄えあがった。

阿Qはあたりを見廻わすと、頸をのばして聞き入っていたひげの王の頸を

(1) 張天翼、阿Qについて、「耕耘」出版社、上海、1949年、39—40頁

めがけていきなり右手でたゝいた。

——そら見ろ！

未荘に革命党が近づいたという知らせが伝わったときに、そしてみんなが町に革命党が近づいたという噂したとき、阿Qはこの事件を利用することに決めた。

「革命をするんだ、何もかもひっくりかえす——これはいゝぞ——阿Qは考えた。——忌いまして憎たらしい連中をみんなひっくりかえすんだ。……おれは革命党の仲間になったぞ！」

しかし革命党になろうという彼の試みもうまくゆかなかつた、外国の主人——「ニセ毛唐」がそれを許さなかつたからである。

阿Qはきびしい制裁をまらうけた。彼は捉られて町へおくられる。それは未荘の「趙旦那」の家を掠奪したという嫌疑のためだつた、ほんとは彼に何のかゝわりもなかつたのだが、こうして後には銃殺される。

「ありのまゝを全部申せ。そうすればお前の罪はかるくなろう。白状しろ——繩をといてやるぞ！——趙家掠奪事件の取調べ役人が審問した。

——おいらは、ほんとに、仲間に入りたかつたんだ……——口ごもりながら、阿Qはまごまごして答えた。

——じゃ、どうしてお前は革命党に入らなかつたんだ？——取り調べの役人がつゞけた。

——「ニセ毛唐」がゆるしてくれなかつたんで……

——出鱈目だ！いまではおそい……何処にお前の相棒がいる？

——なんですか？

——あの晩趙家を掠奪したのは誰だというのだ。

——連中はおれを呼びに来なかつたんで。自分らだけではこんで行きやんした——阿Qは憤然としていった。

後に彼は突然黒い字のついている白チヨッキを着せられた。阿Qは悲しくなつた、というのは、これは喪服と同じだつたからで、喪服というものは気もちのいゝものではない。ちようどその時、両手を背中に縛りあげられ役所から

引き出されて、愧なし馬車に乗せられた、何人かゞ彼と一しよに坐つた……阿Qは道を知っていたから不審に思つた、どうして刑場へつれてゆかないのか、他の者の見せしめのために町をさらして歩くのだということを彼は知らなかつた。

暗い気分で阿Qには憂愁がさまよつた、しかし彼の感覚は押しつぶされ打ちひしがれていた。

——20年後には生れかわつて……阿Qは興奮して、これまでに言つたこともないこの未完のことばを誰に教えられるともなく大声に叫んだ。

……いゝぞ！——群衆のなかから声があがった。しかし、忽ち彼の眼はポーッと霞んで耳鳴りがし、彼の軀ぜんたいが微塵になつたように飛び散る思いがした。

これが魯迅の小説の主人公の生涯の終りである。もし作者が彼の否定的特徴を誇張したとするならば、次のことはうたがいない。集合的な典型阿Qに魯迅はかぞえきれないほどの欠陥を肉化することに成功した。この欠陥は孔教のふるくさい教えによつてつくられたもので、奴隷の従順をおしえこんだ、それだけにふるい中国の封建社会にとって特徴的なものである。

『……「阿Q正伝」が新聞に連載されはじめたとき、多くのものはその新しい部分があらわれると恐怖と不安にとらわれた、彼らはこう思つたのである。今度は自分の番がまわつてきた、そして自分が嘲笑のまよになっているのではないかと……このときから多くの疑いが拮が⁽¹⁾つた、そして各自が自分を知り、阿Qの形象に自分の暗い面を見出したのである。』

阿Qという人物に、魯迅は真実で典型的な性格を深刻に肉化し、阿Q主義のリアルな芸術的一般化をあたえることができた。

魯迅はその主人公の歴史的根源、その運命、その社会的意味を解明することができた。

阿Q主義は魯迅によつて、社会悪として、封建中国における反動勢力の理不

(1) 高涵漢、閑話、「現代評論」出版、魯迅選集、国立出版所、モスクワ、1945年、155—156頁

尽と憤慨すべき専政を正当化している「精神勝利」の敗北理論として示された。阿Qの形象は魯迅の創作の大きな成功であった、この小説で魯迅は社会諷刺の巨匠となった。魯迅は諷刺と滑稽のこのようなむすびつきを見出した、それは彼のリアリズムの自然さ素朴さと矛盾しなかつた。彼の諷刺の微妙な織物をつらぬいて大きな社会悲劇の輪廓がくつきりとあらわれている。毛沢東はその発言で阿Qの形象を全体的な批評のうちに利用している。

『事をなすにはひろく取り扱うことが必要である、つまらないことに能力をつかわないことが必要である。小事、陰謀、官僚主義と阿Q主義は實際上何にもならない。それらは敵に対してさえ役に立たない、しかもそれを自国人に対して適用することは全く滑稽である。⁽¹⁾』

「阿Q正伝の成因」という雑文で、魯迅は書いている。『わたくしなみに言えば、もし中国に革命がなければ、阿Qもそれに加担しないであろう。しかし一ど革命があつたばあい彼はその仲間になるであろう。わが阿Qの運命はこういうものであるだけかもしれない、そして彼の性格はこのことから二重にはならなかつた。中華民国の第1年(1911年はすでにすぎた、しかもそれを取りもどすことはできなかつた。もしも、将来おなじような事件がおきれば、再びまた「阿Qの形象をした」革命家たちが現れるだろう、という確信がわたくしには育つた。⁽²⁾』

阿Qをもの笑いにし批判しながら、魯迅は不幸な主人公の運命に冷淡であつたのでは決してない、反対に彼は支配階級の人民を奴隷化する文化の犠牲としての阿Qに対して深い同情をあらわしている。魯迅にとって文学創作は決して冷たい分析的研究ではなかつたことをわれわれは見る。人間とその行いに対する態度は魯迅にあつては深い心からの同情によって、その能力と力への信頼そのよりよい志向への信頼、その明徹な理性への信頼によって条件づけられていた。魯迅は何百万の中国の勤労者が自己の解放のためにたゞかう他の戦士をひきだしてくる日の近いことをみとめている。それらの戦士とは過去の圧迫か

(1) 毛沢東選集、モスクワ、1953年、第2巻、19頁、中文、毛沢東選集、304頁

(2) 魯迅選集、国立出版所、モスクワ、1945年、157頁

し自由となった新しい社会機構の人びとたるコミュニストである。

『たとえどうあろうとも、——と周立波は「阿Q論」で強調している。——われわれはそれでも解放の日になる「明日」の近くにいる。さらに何年かたって若い青年男女が阿Q正伝を読んで、きっと驚いて尋ねるであろう。「こういう中国が本当にあったのだろうか？ あったのですよ、親愛な若者たちよ。それもあまり遠くない前にね』⁽¹⁾

中国における人民革命の勝利の後に、いま魯迅のこの思想を評価するとき、当時すでに彼が中国社会の基本的矛盾、すなわち地主の土地所有と土地を耕している農民が土地の権利をうばわれているという矛盾を正しく示していたといえることができる。すでにその頃魯迅は、中国人民の基本問題は土地の問題であり、地主の支配を覆えすことであるという主要問題を提起することができた。

魯迅は土地改革の具体的なプログラムはださなかった。しかし、彼の文学作品は偉大な改革のプロローグであった、その証人となるのはわれわれである。

作者は他の誰よりも辛勞する農民のたましいがわかっていた、彼は貧しい農民の肩にかゝっている体験をはっきりと説得力をもって示すことができた。彼の作品は『奪われて不幸になっている人びとへの深い同情でみたされている。』『ほんとうの情熱のない人にはそれをつくることはできないであろう。』⁽²⁾

彼は現在式に深刻かつ真実に中国の農村を描いた。中国人民が勝利したのち土地改革の遂行に参加しながら、多くの勤勞者たちは魯迅の作品どおりに農村の社会関係を正しく評価することを学んだ。それはつまり、階級の敵を見分け、地主の本質とまた欧米で教育されたブルジョア・インテリの本質をあばくことである。

この点に、作者の文学作品の深刻な革命的意義と教育的役割がある。

「どうして私は小説を書くようになったか」で、魯迅は次のように書いている。『私は10余年前とおなじように、啓蒙的観点をまもっている、それは、書くということは「人生のため」でなければならず、この人生の改善のためで

(1) 周立波、「阿Q」論集、重慶、1941年、80頁

(2) 許寿裳、亡友魯迅印象記、魯迅選集、国立出版所、モスクワ、1945年、198頁

なければならないということである。⁽¹⁾』

魯迅の天賦の芸術的才能は、大いなる深さ、まぎれもない正義、屈辱的に卑しめられ幾世紀にわたって歪められた奴隸的存在である人間の価値を自分のうちに発展させることを人びとによびかけたことにある。

文学作品の頁から作者は自分の創作の任務、人民の智慧の大きな木に自分の才能が属していることについて語っている。中国人民の生活の民族的特徴が反映されている魯迅の小説は、彼がそれによって物語の感情的緊張と生活の真実にうまく精通することができた多様性と豊富さを示している。

彼の時代に支配していた社会秩序を容赦なく判しながら、魯迅は事実の確認にのみとどまっていなかった。作者は封建主義と軍国主義の暗い力にたしでの戦いを呼びかけた。

抗日戦争の最も緊張したときに、魯迅の誕生60年を記念して、中国共産党機関紙「新華日報」は書いている。

『魯迅は人民の作家である、彼はひろい人民大衆のために創作し、つねに人民とともにあった……魯迅の名をわれわれの新文化運動の偉大な旗じるしにしよう。この旗とともにわれわれは究局の目的に達しようではないか。⁽²⁾』

魯迅の創作は中国文学史における輝かしい頁である。魯迅のリアリズムの伝統は、現代中国の多くの詩人の作家の創作に発展させられている。それらは生活の真実の描写にだけでなく、その否定的側面の批判的關係にもあらわれている。国民党支配時代の社会的・政治的機構の批判は、郭沫若、茅盾、老舍、曹禹、丁玲、夏衍、葉聖陶、陳伯塵、張天翼、艾青その他多数の作家の文学・評論作品に反映されている。解放戦争時代の人民の思いと望みは、敵の背後、僻遠の田舎、労働者の中心地で進歩的立場にいた作家によって書かれた無数の小説や素描に肉化された。そのなかで人民はひろく多面的にえがかれている。これらの作家たちの主な功績は、人民の外部特徴だけでなく、内面的風貌も描いたことにある。これを彼らは魯迅に学んだ、その伝統は厳格にもまらら自覚

(1) 魯迅, 第5巻, 107頁

(2) 「新華日報」1940年8月3日, 社説「われわれは魯迅をいかに記念するか」

れ発展させられた。

『魯迅はわれわれに現代中国の画をあたえてくれ、——と丁玲は書いている——道のとぎされているあらゆる人びとを示している。すでに彼はいま、この全く苦しくて矛盾した生活、苛刻な労働と人間を押しつぶしている生活、かぎりのない苦しみの生活をさせたくない。そのとき、唯一つのものがこのような人に残されている、それは誰も経験したことの無い新しい生活をはじめることである。しかし、どこにこの生活への道があるのか？魯迅はわれわれに答えてくれる。「地面のように、道はもともとない。人が歩くと道になるのだ。」人びと自身が新しい生活への道をつくる！……

……魯迅の作品は——と丁玲はつづける——その歴史的・認識の価値を保有しているだけでなく、現在の問題を解決する助けとしていまも必要である……これらの作品はふるい中国からの遺産としてのこっている人びとの意識にある旧習とわれわれがたゞかうのを助けてくれる。⁽¹⁾』

3. 革命的文学者・政論家としての魯迅

魯迅は自国の国民であり、その時代の忠実な息子であり、個人の志向を人民の志向と一体化していた。魯迅の最も積極的な文学的および社会的活動は、中国における階級闘争の最も尖鋭化したとき、革命と進歩の力が増大し、マルクス・レーニン主義の影響がつよまり、唯物論と観念論、リアリズム芸術のデカダンと反動的ロマンチズムとのたゞかいの時期に行われた。彼は敵の理論と学派、「芸術のための芸術」、⁽¹⁾「超階級作家」たちにたいして非妥協的にたゞかった。魯迅はあからさまなまたかくれた戦いの目撃者、証人であつたばかりでなく、その最も直接的で積極的な参加者でもあつた。

ヴェ・イ・レーニン「党の組織と党の文学」で、文学は無党派で政治にかゝわらずにいることができない。文学は社会生活において進歩的役割を果す使命があることを示した。

『社会に生きていながら社会から自由であることはできない。ブルジョア

(1) 「ノーヴィ・ミール」(新しい世界)、1954年、第5号、262—263頁

作家、芸術家、女優たちの自由は、たんに金銭の袋、買収、生活費からの假面におゝわれた（あるいは偽善的に假面をつけた）従属にすぎない。⁽¹⁾』

魯迅の活動は、命数がつきようとしてはいるが、まだふるい権力をしぶとく握っている時代、体質的に彼にとつて憎むべき腐敗した「血と涙の世界」への抗議からはじまった。しかもわれわれは、作者の早期の作品にすでに「人喰いの世界」を憤りをこめて暴露し、封建勢力と清朝の反動にたいして猛烈なたたかいを行い、自国の人民につかえ、その解放という偉大な事業のために情熱をもってあらゆるエネルギーをなげだしたことを見ることができる。

『階級社会に生きていて——と魯迅は強調した——闘争の時代に作家が超階級的になろうとすること、また闘争からはなれて独立しようと努めること、現在に生きていて将来のために書くこと、これは幻想によってつくられた幽霊であつて人間でないことはあきらかである。これは頭髪をひっぱって持ち上げようとするのと異るところがないではないか。⁽²⁾』

思想性とはっきりした目的意識をもった彼のすべての創作は、圧迫された勤労大衆への深い同情でつらぬかれている。魯迅は中国プロレタリアートの解放闘争にこれほど熱烈に参加していたからこそ、不屈不撓に真理の偉大な事業をまもりながら、暗い反動と封建的野蛮にたいする勇敢な戦士となつたのである。それゆえ彼は書いている。

『中国における人が人を憎しむ機構の野蛮な秩序の崩壊になんの哀惜の情もない。』

『われわれの同志は——1931年魯迅は「中国の革命的プロレタリア文学とその先駆者の血」という雑文に書いた、——革命的プロレタリア文学と革命的勤労大衆は共通の運命をもっていることをその血潮をもって証明した……』

1919年にはじまった新文化運動は中国人民の革命闘争と直接のむすびつきを見出した。この点で、中国の新らしい進歩的文化の大きい意味はうたがいない。中国の進歩的文学と芸術は、現実の真実の反映、社会の推移過程の意義を

(1) ヴェ・イ・レーニン、全集第10巻、30頁

(2) 魯迅、第5巻、36頁

ひらき、西欧の反動的イデオロギーの残存物と影響への苛惜ない暴露という目的に奉仕した。

『魯迅の作品は——と馮雪峯は言っている——文学創作の領域で文化革命の基礎をすえた現実の力であった。魯迅の作品、主として、彼によって「雑文」とよばれた評論は、封建主義のイデオログにたいし、保守主義者にたいし、昔にかえそうとして、敵におもねり、革命をこわしその滅びるのを望んだもの⁽¹⁾に対し、人民と革命のあらゆる敵に対し、たゞかいの武器となった。』

魯迅を先頭とする進歩的作家たちの活動が、当時の革命思想、中国共産党の政策とどんなに緊密にむすびついていたか、作家たちがいかにして民族解放闘争の積極的参加者になったかについては多くの証拠がある。

魯迅は帝国主義侵略にたいする民族統一戦線の断乎とした擁護者であり、日本帝国主義への積極的抵抗をよびかけた。

1935年魯迅が死ぬすこし前、彼が重い病いで臥していた時に、中国共産党は日本帝国主義に抵抗する戦いのために民族統一戦線結成のスローガンをかゝげた。魯迅は民族統一戦線の組織を失敗させようとする反革命分子の意図を暴露して、コミニストのスローガンをまもる声明をだした。『わたくしは全面的に賛成する——と魯迅は強調した——中国共産党によって提案された全人民の抗日戦線の政策を。しかも文句なしにこの戦線に加入する、なぜなら、わたくしは作家であるばかりでなく、中国人だからである。わたくしはこの政策が全く正しいと思う。

わたくしは統一戦線に参加する、そのために筆をもって、自分の作品と新しい翻訳をもって戦うであろう。もし必要とあらば、筆にかえてほかの武器をとることも辞さない⁽²⁾。』魯迅はプロレタリア運動の任務に照応している文学の創造のために戦った彼の指導する左翼作家連盟に注意した。

魯迅は激烈でねばり強いたゞかいなしには、新しい文化が決して生れて

(1) 馮雪峯、魯迅——中国の偉大な革命作家、「人民中国」、18—19、北京、1953年、48頁

(2) 魯迅、第6巻、533—534頁

ないことをはっきりと知つた。それゆえ、彼は確信をもって言つた。『……新しいスローガンはファシズムとあらゆる反動勢力にたいする血まみれのたゞかいの停止を意味するので決してない、かえって、このたゞかいを深め広めることであり日本と人民の裏切者に対するより實際的、より断乎とした具体的な闘争形態である……このような民族的立場が階級的である。⁽¹⁾』

抗日統一戦線の存在したその日から、魯迅は文化工作者の力を動員するために大いに力をつくした。いろいろな流派やグループの作家たちを統一した愛国の陣営に団結させた栄えある役割は彼のものである。彼は、それぞれの作家はもし誠実な中国人であるならば、侵略とたゞかう民族戦線に参加せねばならないことを強調した。

「国防文学」のスローガンのもとに団結して抗日統一戦線に対抗する作家もこの時にはいたことに注意せねばならない。「国防文学」のスローガンはその狭さのために、他の一連の文学的・政治諸問題を解決できなかった、そのためおそらく統一民族戦線に勝てなかったのであろう。

『民族・革命戦争の大衆文学は——と魯迅はいった——義勇軍や学生の請願デモの記述にかぎられてはいけない……それはもっと広汎であらゆる面を含んでいる——人びとの生活の方法から意識や戦いの問題まで……げんざい中国人にとって最も尖鋭な問題は、民族の生存の問題である。しかも、中国にとって唯一の活路は、日本に対する全民族の革命戦争である……』⁽²⁾

中国共産党の財政が信じられぬほどまで困難になったとき、魯迅は苦しい仕事で得た稿料を一再ならずその処置に任せた。何人かのコミュニストがたえまない追跡をうけ彼らに逮捕の危険があつたとき、魯迅は身の危険もかえりみず自分のところに隠してやった。反動勢力が再び中国紅軍とソヴェト地区を攻撃したとき、魯迅は大胆に国民党のテロルにもかまわず抗議をよびかけた。

魯迅についてはたくさんの批評や研究労作がある、けれども彼の特徴づけとして最も正確なのは毛沢東のものである。

(1) 魯迅、第6巻、589—590頁

(2) 魯迅、第6巻、590—591頁

『われわれが魯迅を記念するのは、彼が偉大な作家であつたばかりでなく——と毛沢東はいつている——また、民族解放の先駆者であり、革命に大きな貢献をしたからである。魯迅は中国共産党の組織には入つていなかったが、彼の思想、行動、創作のすべては、その性質上マルクス主義者のものであつた……したがって、魯迅は動揺することなしに、封建勢力と帝国主義にたいして断乎とした闘争をおこなつた。

魯迅は壊滅の過程で封建社会を示し、社会制度の欠陥と帝国主義の圧迫する力を痛烈にあばき出し非難した。彼は諷刺の筆をもって暗黒勢力を暴露した。彼は輝かしい言葉の芸術家であつた……

われわれは魯迅の戦闘精神を、彼が中国人民の解放闘争で指導できるように、民族解放戦争のすべての部分の兵士にまでもちこまねばならない。』⁽¹⁾

魯迅は革命作家としての自分の地位をいつもかえたことはなかつた。彼は自分の文学作品には異常に根づよくきびしかつた。毎日の、倦むことない、靈感でも感じたような祖国の幸福のための仕事は、ほとんど魯迅の行いの重要な規範であつた。晩年の彼はしばしば重い病気におそわれた。追跡も、警察の監視も、彼のねばりと意志をくじくことができなかつた。彼はつねに反動にたいして新しい非難をあびせた。諷刺作品に、政論的短評に、小説集に、散文詩に、彼の政治的非妥協性と自国及び外国の中国を奴隷化するものへの深い憎しみが芸術的形態をとってあらわされている。魯迅の評論的遺産——短かい素描、雑多な短評、論文、とフェリトンは作者が中国人民の戦闘的な革命闘争に直接参加していることを証明している。

『魯迅は——と毛沢東は語つている——暗黒勢力の支配の環境にあつて、言論の自由をうばわれていた、それゆえ、全く冷たいアイロニイと尖鋭な諷刺のフェリトンの武器でたゝかつたのである。』⁽²⁾

魯迅の作品にはまた社会的たゝかいにおける文学の役割についての思想、人間の意識における素晴らしい影響についての思想、リアリスチックな人民文

(1) 毛沢東、延安における魯迅記念祭での演説「7月」10号、289頁

(2) 毛沢東造集、モスクワ、1953年、第4巻、162頁

学をつくる原則への観点が反映されている。

魯迅の小説と輝かしい政論は、靈感にみちた芸術家、愛国作家、人民にわかりよい新しい文学言語の改革者および基いをすえた人、兇悪で残忍な敵の前に屈服しない中国革命のほんとの理想として今なおのこっている勇敢な戦士であることをわれわれに示している。

どのすぐれた芸術家もそうであるように、魯迅にもその中心テーマ、その言語と形象、その様式がある。彼の作品の典型に中国的色彩、魅力、暖かさ、彼の中国人民の自由への燃えるようなそして消えることのない志向はすばらしい。このすべてが、魯迅の作品をほんとのリアリズムに、深刻で原則的な思想内容にみちたものにしてている。

魯迅は革命文学の旗をたかくかき、憎むべき反動勢力との公然たるたゞかいを避けたことはなかつた。『真の英雄は——と魯迅は書いた——暴虐をおそれずに、血潮の流れを敢て見ることができる。⁽¹⁾』

魯迅はどんな障害のまえにもとゞまることなしに、前を見つめる勇氣をもつことを絶えず呼びかけた。

次の彼の靈感を起させる言葉は有名である。

『生命は斃れたものゝ肉体をこえて前進する！』『あたりを眺めまわさないで新しい道の前へ立て！』⁽³⁾

死ぬすこし前、抗日戦争の前夜に、魯迅は語つた。『……日本の侵略者に抵抗する全人民の革命戦争において、これは中国にとって唯一つの活路である……それゆえ、われわれにとって必要なのは、真実の生活、生きいきとしたたゞかい、思想と感覚のたえまない運動を内容とする作品である……』⁽⁴⁾

魯迅は革命的な作家、戦士であつた。

『わたくしは深く確信した——と彼は語つた——階級のない社会のあらわれるのは必然的である、これはわたくしのあらゆる疑念を払いのけたゞけでな

(1) 魯迅、小説と評論、国立出版所、モスクワ、1950年、119頁

(2) 魯迅、生活の道、「ガリャーチー・ヴェチェル」第2巻、1925年、87頁

(3) 魯迅、第1巻、197頁

(4) 魯迅、第6巻、591頁

く、わたくしの力を幾層倍もましている。⁽¹⁾』

これが魯迅のあらゆる創作の道にとって特徴となつている生活によつて確信させられた世界観と社会的・政治的活動の基礎と原則である。

『魯迅の方向は——と毛沢東がいつた——中国人民の新らしい文化の方向である。⁽²⁾』

ひろい人生の経験、ねばり強いたゞかいの経験が、魯迅に、人類社会の発展法則を理解させ、革命が人類解放のたゞ一つの道であることを確信させた。魯迅の楽天的観点は、自国人民への深い信頼、人民の強い力、民族および社会の解放のためにたゞかう人民の決意への深い信頼によつて条件づけられた。

『闇の力は——魯迅は断言した——滅亡に運命づけられている……それはながくつゞかない。未来はつねに存在する、しかもそれは光あるものである……われわれの向うには永遠の未来がある、しかもそれは光明あるものであろう。⁽³⁾』

魯迅の予言的なことばは実現された。中国人民は全世界史的な勝利をちかとつた。

『もはや10年になる——と郭沫若は1946年に語つた——魯迅がわれわれと永遠にわかれてから。この10年間に、世界には大きな変化が生じた、ひじょうな大変化が中国でわれわれのもとにおきた。魯迅が呪詛したファシズムは大きな打撃をこうむり、魯迅によつて讃えられた人民の力はいまや輝かしい勝利をおさめた。中国は8年にわたる解放戦争をおこない、とうとう日本帝国主義者を領土外に放逐した。われわれは敢えていうことができる、この勝利は魯迅の後継者たちの偉大な力、不屈不撓で力強い精神によつて勝ちとられたものである。⁽⁴⁾』

魯迅は暗黒勢力、反動勢力、社会悪の避けることのできない終局を信じたばかりではない、彼らがしづかに滅んでゆくのでなく、また自分の地位を進歩

(1) 魯迅、第6巻、26頁

(2) 毛沢東、新民主主義論、外交出版社、モスクワ、1953年、第3巻、256頁

(3) 魯迅、第3巻、344頁

(4) 郭沫若選集、国立出版社、モスクワ、1953年、325頁

と革命の勢力に自ら進んで譲りわたすのでもないことを理解していた。まさにそのために、魯迅は「ふるい世界の病根」を猛烈にあばき、そのおどろくべき罪悪、虚偽、偽善、卑劣と恢復の見込みないことをばくろした。彼は人民大衆が勝利をおさめることを信じた。魯迅の芸術、社会悪と反動の世界の深刻で尖鋭な暴露の芸術、彼の戦闘的リアリズムは中国人民が敵とたゝかう最も力づよい武器となった。

4. 魯迅とソヴェト文学

魯迅の戦友の一人、著名な文芸学者でロシヤ・ソヴェト文学書の翻訳者の北京大学教授曹靖華は、ソヴェト文学が中国文学に深い育成的な影響をあたえたことを指摘している。彼は次のことを強調している。『まさに偉大な10月社会主義革命とソヴェト文学の影響が魯迅を「マルクス・レーニン主義の道」へみちびき、彼の文学を階級闘争と社会改造の武器にすることを助け、この武器をもって彼が……中国人民の解放のためにねばりづよく戦うことを条件づけたのである。』⁽¹⁾

曹靖華はさらに述べている。魯迅はソヴェト同盟の偉大な文学作品を中国に普及させ、そのたすけで何百万の中国青年が自国人民の解放の神聖な事業のためにたゝかう精神を培養する仕事にすべてをなげだした。作者ははじめての社会主義国家——ソヴェト同盟に学ぶことをたゆみなく訴えた。『……光をもとめる人びとの志向に他の道はない。国際文学をひろめることにとゞまっていることはできない、われわれは、とうにわれわれの前を進んでいった人びとに手本をとらねばならないのだ。』⁽²⁾

ソヴェト文学とその中国読者に関する他の文章で、曹靖華は次のように示した。文化革命の領袖魯迅はかぎりないエネルギーをもって、何百万の中国の読者にソヴェト作家の作品を紹介し、ひろめ、これによって人民解放のための神聖な闘争に貢献した。国民党反動の圧政のもとでのソヴェト文学の普及を、

(1) 曹靖華、ソヴェト文学について、「人民文学」、第4巻、北京、1951年

(2) 魯迅全集、第7巻、825頁

魯迅は蜂起した奴隷の弾薬供給になぞらえていった、これは伝説のプロメテ⁽¹⁾スの神々から火をぬすみとることと同じほど重要であると。

魯迅はソヴェト同盟の心からの忠実な友人であった。ソヴェト国家に、彼は先進的人類のすぐれた志向の現実化を見、人類の最も偉大な天才たちの最も大胆で最も革命的な予見の化身を見た。

あらゆる進歩的人類の友として、魯迅はソヴェト国家を深く愛した。彼はソヴェト同盟に負わせられた誹謗と中傷にたいしてたゆみなくたゞかった。彼はソヴェトの生活や文学に関する多くの印象記集を出版した。ロシヤとソヴェト作家の作品の翻訳者として、彼は正確で高い芸術性をもつ翻訳の見本をつく⁽²⁾った。

『魯迅の創作は——と陳伯達教授はいつている——現代中国文化の華である。彼の成功は……中国文化を新らしいより高い段階にたかめた。魯迅は決してその成果に満足せず、よりよき仕事を期待し、中国が人類文化の高みに速かに達するように努めて、自分の仕事をねばりづよくつゞけた。

この偉大な予言者は、ソヴェト同盟が人類文化の頂きであることを理解した。それゆえ、彼はソヴェト文化の疲れることを知らない伝導者であった。すなわち、ソヴェト文化はわれわれが極力求めるべきものであり、われわれが同じ程度にならねばならないものとみなして、われわれがソヴェト同盟に学ぶのを援助してくれた。⁽³⁾』

それだからこそ、魯迅は、全人類に見たこともない美しい自由と平等の世界をひらいたソヴェト国家とその人民にたいし、動物的憎しみの発作で誹謗したすべてのものを自分自身の敵として、憤怒をもって暴露したのであった。

1932年12月、ソヴェト同盟と中国の間の外交関係恢復に関連して、魯迅はすぐれた中国の作家たちとともに人民委員ソヴェトとソヴェト同盟の勤労者に次の電報をうった。

(1) 曹靖華、ソヴェト文学とその中国読者、「リテラトゥールナヤ・ガゼータ」1954年12月9日

(2) 「人民中国」、編集論文「魯迅」とその創作」、北京、1950年、第9号

(3) 陳伯達、魯迅逝去13周年記念の演説、北京、1949年10月

『中国人民はソヴェト同盟のみが世界の被圧迫人民の真実の友人であることをはつきりと見た。』

これは、魯迅が何でソヴェト同盟をまもったかというエネルギーと社会主義国家をそしるすべてのものを彼が攻撃した怒りを理解するたすけになっている。

『われわれの利益は——と魯迅はいった——帝国主義者とその手先たちの利益とは直接対立している。われわれの悲しみは彼らの宝である。そして彼らの敵はわれわれの友である。帝国主義者とその従僕たちはながくはもちこたえられない、彼らはどん底へ落ちてゆく、そして破滅からのがれようとしてソヴェト同盟に汚物をあびせている。彼らが中傷、呪咀、憎悪にすがりついてみてもしよせん無駄なことだ。戦争をはじめることしか残されていない。ソヴェト同盟を滅ぼさなければ彼らは安穩になれないのだろう。何をわれわれはなすべきか。依然として彼らの謔言を聞くのか。

……もし帝国主義者たちの奴隷が戦いを欲するならば、その主人たちと自ら(1)戦わしめよ。われわれの人民の利益と彼らのは直接対立している。われわれはソヴェト同盟を攻撃することに反対する。われわれはソヴェト同盟を攻撃している暗黒勢力を滅ぼそうと努めている、彼らがどんなに蜜のように甘い言葉をいおうと、またどんなに個人的公正の口実をかまえるにしても。

これが、そしてこれのみがわれわれの生活への自分の道である！』

ア・エム・ゴーリキイは書いた、人間として、人格として、ロシヤ作家は人生の偉大な事業、文学、労働に疲れた人民、悲しい自国への献身的で情熱的な愛情の輝かしく照らされた光である。

ロシヤ作家の魂は愛の鐘であった、そして国内のあらゆる人々の魂はその予言的でたくましい声を聞いた。

この鐘はロシヤでだけ魂をよびさましたのではなかった。そのたくましい声はわが国の国境をこえた遠くで聞えた、それは万里の長城の向うの人々の魂にまでつたわったのである。

(1) 魯迅全集、国立出版所、モスクワ、1955年、第2巻、84—85頁

『15年前——と魯迅は書いた——文明国といわれる国々はロシヤを野蛮国とみなした，しかしその文学は世界文学で勝利をおさめた。最近15年のあいだ帝国主義者たちはソヴェト同盟を嫌悪のままとした，しかしその文学は他のすべての文学をずっと追いつくものとなつた。⁽¹⁾』

ロシヤおよびソヴェト文学は魯迅の創作に大きな影響をあたえたように思われる。それは構想，題材の構成，彼の創作がロシヤ・ソヴェト文学に思想的，精神的に近いこと，生活の忌むしいことどもの暴露，封建，地主的機構にたいする抗議と戦いの力からいえることだ。魯迅の生活と創作の道は，多くの進歩的中國作家のように，ソヴェト文学の影響のもとに10月革命以後の時期につくられた。

魯迅は中國におけるロシヤ・ソヴェト文学の熱烈な崇拜者であつたばかりでなく，最も活動的な宣伝者であつた。エム・ゴーリキイ，エム・ショーロホフ，ア・フッデーエフ，デ・フルマーノフ，エリ・セイフリンその他の翻訳は魯迅のものである。1931年に魯迅の翻訳でフッデーエフの「壊滅」，1934年にゴーリキイの「ロシヤのお話」と「悪魔」，ゴゴリの「死せる魂」と「鼻」サルト・イコフ・シチュードリンの「或る町の物語」のうちのある章，チエーホフの短篇を訳した。1932年に魯迅はソヴェト作家20人の短篇集を出版した，そしてこの短篇集の主な部分は魯迅自身が訳したものであつた。彼は翻訳の熟達者たちを養成した，それらの人々の活動のおかげでソヴェト文学は中國においてたえることのない流れとなって突進したのだった。それら人たちのうちで卓越した地位をしめているのは曹靖華教授と戈宝全である。

ソヴェト作家たちの作品が中國で出版されたのは魯迅の力で組織されたからであつた（ショーロホフの「静かなドン」，グラドコフの「セメント」，ゴーリキイの「1月9日」と「プレベストニクの歌」，曹靖華その他の訳の「ソヴェト作家7人集」）。

馮雪峯の言によると「ロシヤ古典文学とソヴェト文学の翻訳に費した時間は，魯迅が文学活動に費した総時間数のおよそ4分の1を占める。」

(1) 魯迅全集，国立出版所，モスクワ，1955年，第5巻，53頁

瞿秋白は魯迅あての手紙で「ソヴェト文学の普及を中国のプロレタリア作家の主な任務の一つとして」、また「中国のあらゆる革命的文学者の責任として」特徴づけた。これに関して曹靖華教授は「ソヴェト文学について」の論文で次のように書いた。

『国民党の血のテロルの環境のもとで、瞿秋白、魯迅その他の中国革命文学の先駆的活動家たちは、中国共産党の集体的知慧のおかげで、彼らの道を照らす燈台と同じく……ソヴェト文学の普及を最も重要な革命的政治的任務として考え、この偉大で神聖な事業に献身的に努力した。危険と追跡にもかかわらず、またあらゆる辛い経験にうち勝つて、彼らは前途に明るい展望を見出し、この目的への新らしい道を拓いた。⁽¹⁾』

ソヴェト文学を宣伝し、人類の真の進歩はソヴェト同盟と離しがたくむすびついていることを知った魯迅の活動は、中国で多くの革命作家をつくることを助けた。雑誌「文芸報」⁽²⁾に掲載の「魯迅はわれわれにソヴェト同盟に学ぶよう呼びかける」という論文は述べている。『ソヴェト文学の普及は中国の新らしい文学に新鮮な血液を注ぎこんだのと同じだった。過去においてこの過程はそれ自体ひじょうな困難とむすびついていた……ソヴェト同盟に学ぶことを呼びかけながら、魯迅は中国の革命の現実から出発した。形式的に、民族芸術の創造は、人民大衆にわかりやすく彼らと密接にむすびつき、人民の生活を反映し、人民を教育する芸術を勤労者にあたえるべく方向づけられた。リアリスト魯迅、彼の創作は民族芸術の古典の模範である。魯迅は正当にも「中国のゴーリキイ」とよばれている。われわれがよりよく人民に奉仕できるように、われわれは魯迅の遺言した事業を断乎としてつゞけ、よりよくソヴェト同盟に学ばねばならない。』

ソヴェト同盟とその文学、芸術への傾倒を公然と宣言しながら、魯迅は社会的不平等の圧迫の世界、ブルジョア社会の「文化」への憎しみを決してかくさなかつた。

(1) 雑誌「人民文学」、第4巻、1号、北京、1951年

(2) 「文芸報」、20号、1950年

魯迅は国内および国外の反動と帝国主義侵略に反抗する中国人民のたゞか
いの旗であった。

『中国に——と魯迅は書いている——資本主義諸国の文化といわれている
ものを私は見ない。私はたゞ資本家やその手先たちが化学的方法や電気の道具
を革命家たちの拷問に、飛行機や爆弾を革命大衆の屠殺のために使っているの
を知っているだけだ。⁽¹⁾』

深く独創的な作家の魯迅は、中国人民なしに自分を考えなかったように、
中国以外の外国で自分を考えなかった。それとともにソヴェト人民の文化が彼
に固有な、深刻に民族的な創作に靈感をあたえた。

『魯迅の愛国主義は——と馮雪峯が指摘している——その根源が人民をよ
く知り、人民に愛情をいただいていたことにある。しかも、この深くて限りない
人民への愛情は、彼の作品をロシヤ文学のすぐれた作品に近似させるもので、
彼の作品ぜんぶにあらわれている特徴である。⁽²⁾』

自分の時代と自分の人民のために、魯迅は、ゴーリキイの創作が中国人民
の感情と意識の表現であるという意味で、偉大なゴーリキイの作品を訳した。
彼の作品は新しい社会、新しい生活を建設し、新しい文化を創造するた
すけになったし、たすけになるであろう。

『わたくしは固く信じている——と魯迅は書いた——将来は疑いもなく、
われわれが文学遺産を受けついだ者であるばかりでなく、新しいものゝ基を
さだめたもの、建設したものであることを証明するであろう。⁽³⁾』

「東洋におけるチェーホフ」という文章で、郭沫若はチェーホフと魯迅の
リアリズムの特徴の共通性を述べながら指摘している。『魯迅の創作がチェー
ホフの死後30年以上も経ってから行われたということは、ソヴェト同盟におけ
る10月革命の勝利と中国における進歩勢力のたかまりを自分の眼で見ることを
彼にゆるした。「200年」の距離は不必要に思われた、明るい展望がずっと早
く近づいた……明日が今日に近づいた。チェーホフがみなに聞えるように大きな

(1) 魯迅、第6巻、26頁

(2) 馮雪峯、魯迅とロシヤ文学、「人民中国」、第9号、北京、1950年、9頁

(3) 魯迅、第7巻、848頁

声でいえなかったことを、魯迅とゴーリキイが言いあらわした。⁽¹⁾』

ゴーリキイにとってそうであったように、魯迅にとって文学は社会機構の不正と罪悪を容赦なく暴露する活動舞台であった。魯迅はよびかけた『……ふるい社会、ふるい勢力と断乎としてねばりづよくたゝかうこと……』⁽²⁾、また『……将来のものである真の新らしいものと健康なものを正当に評価すること。』⁽³⁾

魯迅は、ひろい人民大衆に簡単でわかりやすい芸術形象に自分の思想を真実に肉づけて、これらの大衆に搾取者と奴隷化している連中へのたゝかいをよびかけた。

ゴーリキイと同じく、魯迅は彼をとりまいてる困難で複雑な生活環境について、彼が途上でであった人びとについて語っている。魯迅はゴーリキイのように、人民の創造力と能力を信じて、悪の根源を勇氣をもってあばいている。その熱烈なたゝかいをもって魯迅は読者の愛国主義の感情をよびおこし、真理と公正の勝利の避くべからざることを証明している、この点にすぐれたロシヤ・ソヴェト作家たちの創作との深いむすびつきがあらわれている。

『魯迅、この偉大な作家の作品は——と馮雪峯は指摘している——魯迅の同時代人にとつても、将来の世代にとつても、リアリズムの古典的模範になった。しかもちようど彼のリアリズムに、われわれは何よりも明らかに、ソヴェト同盟と新らしい中国文学のむすびつきを見る。』⁽⁴⁾

「人民文豪魯迅」という本で、現代の政論家平心は指摘している、魯迅は「中国のゴーリキイ」と名づけられた、そしてこれは彼の名前を最もポピュラーにした。「中国には——と平心は述べている——たゞ一人魯迅がいる、ソヴェト同盟にたゞ一人ゴーリキイがいるように。彼ら二人は世界プロレタリアートの文化戦線の偉大な戦士であり、勤労大衆の最も親しい友だちである。彼ら二人はリアリズム文学の卓越した巨匠であり、ふるい社会の非妥協的反对者で

(1) 郭沫若選集、国立出版所、モスクワ、1953年、343頁

(2) 魯迅、第4巻、239頁

(3) 魯迅、第3巻、156頁

(4) 馮雪峯、魯迅とロシヤ文学、「人民中国」、第9号、北京、1950年、32頁

あつた。彼ら二人は自国人民の革命的文学運動の指導者であり、彼ら二人は自国だけでなく全世界のものである。⁽¹⁾』

魯迅はその全作品をもって、その全活動をもって、封建的およびブルジョア社会への憎しみ、人間が憎しみあう秩序への憤り、中国における朽ちては命数がつきたすべてのものを掃い出す新しい革命勢力への信頼を示した。これが彼を偉大なゴーリキイに近づけ、二人の芸術家の親近性を決定づけている。魯迅はゴーリキイのように、読者にたいし、たんに人間性だけでなく、人間による生活の権利獲得の不可避性の意識を呼びおこそうと努力した。

ゴーリキイの言葉でいえば、あらゆる偉大な芸術家はその国その階級の感情を敏感に表出するものであり、その耳、眼、心臓である。彼はその時代の声である。魯迅もまさにそのような芸術家であつた。「この重要な時における作家の任務は——と魯迅は語つた——すべての有害なものにすぐさま反応し、あるいはこれを反駁し、感覚の神経、攻撃と防禦の機関にならねばならないことにある。⁽²⁾』

魯迅がどうして20世紀のはじめに中国において自己の解放のためにたゞかう人民の文学を宣伝したか、また政治的圧迫と物質的困窮にもかゝわらず中国におけるソヴェト文学のたゆみない普及者となつたかは、これによってわかるう。

ソヴェト同盟に学ぶことをよびかけながら、魯迅は民族形式をもつ芸術は人民大衆にわかりやすく、彼らと緊密にむすびつき、人民の生活を反映し、人民を教育すべきものであるということから出発した。わが国で、偉大なゴーリキイがなしたのと同じように、魯迅はその時代、自国の人民のために仕事をした。彼の創作は中国人民の感覚と意識の表現であつた。彼の作品は新しい社会、新しい生活をつくり、新しい文化を創造する助けとなつたし、また助けとなるであろう。

(1) 平心、人民文豪魯迅、「新生活」出版、上海、1947年、2頁
(げんざいは「新文芸出版社」1956年、上海で新版が出ている)

(2) 魯迅、第6巻、13—14頁

5. 魯迅の言語と芸術的方法

魯迅は新しい中国の文学言語の基いをさだめた人である。言語と文体の方面で、魯迅はまぎれもない改革者であり革命家であつた。彼は言語を人民にはわからなく縁のおいものにして生きた言葉の生気をうしなわせる孔教のいましめによる昔の文語を勇敢に断乎としてやぶつた。魯迅は何千年ものあいだ貴族の言葉で書かれた文言というものゝために、国民の文学を用いる可能性をうばわれていた人民に、親しくわかりやすい言語をつかつたほんとうの人民文学を創造することを要求した。

『われわれまで伝つてきた昔の中国文学はすべて、何人かの聖賢の後継者たちが自分自身のために書いた思想と規律を含んでいる。人民はどうかというと、ちょうど大きな石におさえつけられた草みたいに；4千年のあいだ衰え凋⁽¹⁾んで沈黙してきた……』

新しい言葉をいためつけ、その層から人民の言葉を掃き出そうとするスコラの規範をもつふるいドグマ的形式（「八股」など）をうちこわして、魯迅は少くとも文学言語をできるだけ人民の言葉に近づけようとして、新しいものゝ創造のために勇敢にたゝかつた。新しい言葉と文体の方法によって新しい内容をつたえることは、魯迅の大きな任務であつた、このおかげで中国の作家たちの文学創作は高い段階へとたかめられたのである。

生きている人民の言葉に基いた新しい文学言語の創造において、魯迅の貢献は過重評価することがむずかしい。魯迅は、封建的貴族がその芸術を尊び庶民の習慣と観点とはちがつたまた支配階級が庶民の本分と権利と異なる特権としての自己の習慣と観点をつくって、意識的に中国文学の宝を人民にあたえなかつたことを強調した。

「庶民」の言葉で文学作品や評論を書くことはこの貴族の仲間ではきわめて無教養で卑俗なものとみなされていた。魯迅の功績は、ひじように複雑な文学の文言という昔のスコラ的で死んだ文学言語に反対してたちあがった人びとの

(1) 魯迅選集，国立出版所，モスクワ，1945年，3—4頁

うち最初の人であったということにある。

『中国といえども——魯迅は指摘している——それ自身の文学がある、しかしそれは人民からはなれている。これは昔の文献を理解するために困難である、それはたゞ昔の思想に注釈しているにすぎない、その声は過去のものである——そのすべては意義をうしなっているということである。したがって、われわれは互いに理解しあえず、一盤散沙と全く同じである。⁽¹⁾』

ふるい言語の形式は中国文学の新らしい内容にはもうそぐわなくなってしまう。過度に複雑で誇張され儀式的な見せびらかしと偽瞞が、具体的内容をうばわれた概念の類似だけを言葉にのこした。このふるぼけた形式のために、20世紀にはすでにみすばらしい多くは孔教のドグマの思想が消えてなくなった。『もし作品がわれわれの時代に最小の関係ももたないとしたならば、われわれは作品をつくれるだろうか？——と魯迅は問いをだしている。成功した作品でさえ唐宋時代の声として、韓愈、蘇軾の声としてのこっているのであってわれわれの時代の声ではない。そしてすべての中国人が今日にいたるまで、そのふるい文字の綱渡りにしがみついている。⁽²⁾』

ブルジョア・インテリの反動的分子は、もはや封建的・地主の上流階級については語らずに、観念論と神祕を尊びながら「下等な大衆の言葉」から自分をまもった。

瞿秋白は書いた『封建主義の残りが中国人の生きた話し言葉をかたくしばかりつけている。死んだものがあいかわらず生きているものに権威をたもっている。新らしい言葉、新らしい文学、新らしい文章を求める戦いと、中国社会に形成されている新らしい関係、新らしい現象、新らしいもの、新らしい世界観を表現できる言いまわし、これがそれぞれの中国の文化人の最も重要な任務である。⁽³⁾』

かくて魯迅は昔の書物の言葉の舞台に、民主的なほんとの人民の言葉をも

(1) 魯迅、第4巻、23頁

(2) 魯迅、第4巻、23頁

(3) 瞿秋白、即興詩その他、「東北書店」出版、1946年

つてあらわれた。魯迅は文学創作の扉をその時代の生きている言葉の前に、つまり人民の豊かで明るい話し言葉の前に広くあけひろげた最初の人びとのうちの一人である。彼は文学言語の更新のために倦まず努力した。『文学を物好きのなぐさみにしてはいけない——と魯迅は教えた——現代の文学言語で誰にもわかるように平易に書かねばならない。』⁽¹⁾

魯迅の言語の力はその人民性、きりはなしがたい生活とのむすびつき、現代性にある。彼の言語のひびき、色彩と語彙は有機的に生きている言葉とむすびついている。『復活したいならば——と魯迅は確信をもっていつている——若い世代は何よりもまず孔子、孟子、韓愈、柳宋元その他のくりかえしをやめねばならない。われわれは他の時代、他の環境に生きているのだ……われわれは自分たちの現代の生きていることばを話し、われわれの思想、感情をはつきりと平易に表現せねばならない……』⁽²⁾、そしてさらに、『真実の声のみが中国人民と全世界の人びとの心をうごかすことができる、真実の言葉によってのみ世界のすべての人民とともに生きることができる』⁽³⁾

新しい人民の言葉をもとめた魯迅はその鋭い諷刺のたすけで戦った。

たとえば「故事新編」のなかの「出関」にはこのような鋭い諷刺がしめされている。⁽⁴⁾

魯迅は彼のもちものである諷刺によって絶元1世紀に生きていた老子、孔子、荘子の言葉をいまにいたるまですてることができなかつた人びとを嘲笑している。

魯迅は高い教養を身につけた人や、時には専門の文献学者にさえ詳しい注釈なしにはわからない昔の哲学論文「道德経」からの言葉に注意をむけた。『生活に現実化される道は不朽の道ではない、ちようど道じしんに表わされる言葉が不朽の言葉でないように。』或いは『永遠に何の欲もなしに最も聖賢なもの

(1) 魯迅, 第4巻, 25頁

(2) 同 上 27頁

(3) 同 上 28頁

(4) 同上, 第2巻, 449頁

を悟ることができ、あるいは絶えず求めながら道の精神を認めることができる。⁽¹⁾』

「出関」で魯迅は死んだ言葉に頑固にしがみついているあらゆるものへの鋭い諷刺文を創造することに成功した。魯迅によると中国古代からの「徳行」は、幾世紀にもわたる封建的圧迫を解放されない人民の身につけさせるようなものとして表わされている。「出関」での魯迅の言語はとくに尖鋭、深み、するどいアイロニー、特徴づけの独創性とおどろくべき精巧さによって区別されている。しかし、魯迅の豊かで複雑な言語遺産が言語の簡素さと人民性をまもることに帰するということは正しくなかったかもしれない。ふるい中国の文学と言語を完全にわがものとして、彼は諺やお伽話の言語だけでなく高い複雑な思想の言語も使うことができた。

文学における新しい生きている言葉を是認はしたが、魯迅は中国の民族言語を破壊はしなかった、彼は貴族によって意識的に支持された古くさい美辞麗句や古風な表現をのぞいただけで、生きている人民の言葉と同じく昔の文学言語も充分にとり入れたのであった。生きている人民の俗語や大衆語ですら、魯迅の物語や対話にはとくに明らかに自由にあらわれた。ここで、登場人物が昔の生活環境のもとで描かれたばあいでも、話相手との表現や形式は伝統的なもったいぶった礼儀作法の規範から自由となり、固苦しくないものになった。魯迅は昔の文学言語、古典作品からとり入れて話言葉の範囲を拡張した、それらすべては、言語に鋭さと清新、表現力をあたえた現代の人民一般の標準と特別の努力なしに一致する人民的性格の明確な痕跡をとどめている。

人民のお伽話に関する魯迅の労作は、人民の文体の素朴さの複製の彼の手法及び文学的な書物の創作と耳で聞いてわかる創作との総合の方法を明確に反映している。

紋切型に反対し、冗談をやめる党の活動をよびかけ、レーニンがしたように高慢にならず自慢せずに、毛沢東は「北斗」雑誌社への魯迅の答え、いかに文学作品をつくらねばならないかを手本として引用した。

(1) 魯迅全集、第2巻、569頁

「こゝには「それぞれの現象を究めること」が語られている、たんにある一つの現象あるいはその半分だけではない。こゝで語られているのは「多く観察すること」であり、一眼みたり半ば眼をひらいて見ることではない……魯迅は「少くとも2回読むこと」を忠告している。ところで、多くは？これについて彼は何もいわなかった、わたくしは重要な文章は10回以上読んでかまわない、まじめに添削してから発表すべきだと思⁽¹⁾う……』

魯迅には生き生きと眼に見えるような思考と文字の創造的な方法、生活描写の手法がある、そのなかで彼は罪悪、欠陥、世俗的不正をはつきりと見ている。魯迅の注意は生活の暗い面にひきつけられた。彼はそれを自己流に、考えぶかく真実で勇敢な文学者の方法で、描写しようと努めた。彼はつかい古した役にたゝない方法をとらず、自分独特の形式を見つけだした、それはお伽話（歴史小説）と短評である。彼はしばしば文学の筆を評論の筆にとりかえた。

魯迅はその評論で、虚偽で卑屈で臆病な文学にたゝかいを宣した。

魯迅に文学的名声とひろい人気をえさせた小説と散文詩の成功は、彼がえらばれた鑑賞家や洗練された美学者のために書いたのではなく、平凡な読者のため広汎な聴衆のために書いたことによって説明される。魯迅は決して言葉の綱渡りをしなかった、彼は言葉のためにはいつでもすべてを投げ出すような人びとの範疇には属していなかった、彼はまた、言葉の交錯を決して見ず考え出された短い言葉に小躍りして喜べるあまりにも「繊細な」形式の狂信者にも似ていなかった。彼の創作にはある作家たちが見ならつたサロンの美しさはまったくなかったし、見当ることはなかったかもしれない。厳密で入念に仕上げられた言語が魯迅を他の多くの同時代人とはつきり区別している。

魯迅の作品、たとえば「狂人日記」、「孔乙己」、「藥」、「明日」、「風波」、「故郷」、「阿Q正伝」、「端午節」を読むと、言語の極度の簡潔と素朴さや二三筆で環境を特徴づけ、主人公の主な特徴をえがくことがうまいのに気がつく。敘述、特徴づけ、形象から有機的で独創的な全体を創造する文学的任務、深刻

(1) 毛沢東選集、党八股に反対する、モスクワ、1953年、第4巻、113—114頁
(中文、毛沢東選集、第3巻、864—865頁)

な思想内容をもって新らしい現代の文体をみたすこと、表現力と同時に民族的な中国的性格をそれにあたえること、これらの任務を魯迅は作品において輝やかしくなしとげた。魯迅の文学作品の最も重要な特徴は、彼が小さい日常習慣化したこと、些細な描写から、きわめて自然に高度の思想的な一般的結論に移つてゆくことにある。その例になるのは「故郷」である。こゝで、魯迅は23年前に去つた故郷に帰つた人間の思想と感情を読者とともに分ち合つている。陰鬱でみすばらしい田舎の風景画が遠い子供の時代の思い出によってとって代られる。魯迅はその特有の習慣と儀式から村の生活状態を生き生きと描いている。彼はむかしの家に新たに戻つてきたようだ。彼の子供のときの素朴に思われる友だちの閩土についての小説で、読者は思わず生きているものと伶俐な農民の子閩土への同情の念にみたされる。彼は海辺に育ち僻遠の町へたった一回行つたことがあるだけである、後に大人になってからの閩土には憐憫の思いでいっぱいになる。彼は辛い労働にいためつけられ疲れ果て、ゴツゴツした手は裂目だらけで樹の皮のようであり、脹れ上つた真赤な眼をしている。

しかし作者はふたたび自分の家を見捨てる。故郷の風景は見知らぬパノラマにとってかわられている。故郷へ帰るといふ願いをためしてはみても、いまや彼には新らしい生活への夢が波立つ、それは閩土の生活のようにおそろしいものでなく、魯迅の身に長いことふりかゝつた全く絶えまない貧困と不幸でもなく、その他すべての人びとの生活の不倖せで希望のないものでもない……彼は中国人民がこれまでにまだ一度も知つたことのないスバラシイ自由な生活を夢みている。

『わたくしは信じている——と魯迅はこの小説で未来の世代について書いている——高い壁が彼らを隔てないで……わたくしみたいに苦痛の放浪生活をせず、閩土のように痛ましいほど愚鈍な生活もつゞけないことを……彼らはわたくしたちの知らない新らしい生活をしなければならない……』

これは中国農民の痛ましく不幸な生活の小説であり、注意ぶかく考えながら読まねばならない小説である。これは人民の深刻な苦悩と隠された力がある。たとえいまだに奴隷化され、くびきをつけられているとはいえ、この不正をお

もむろに自覚しはじめ、何世紀にもわたる圧迫から解放されるために立ち上がるろうとしている。

「⁽¹⁾薬」には革命家を息子にもつ母の苦悩が描かれている、彼は専制者の残酷な暗黒勢力に反抗して銃殺された、彼の熱い血は死刑執行人によって『肺病をなおすはたしかに効目がある』ものとして恥知らずにも売られる。

『サア！ 銭を出して受けとれ！——黒装束の男が老栓の前に立つて、鋭い刀のような眼で彼を刺しとおすように見た。老栓は縮みあがった。この男は彼の方へ大きな手をのばし、片手には何か赤紫色のものがポタポタ滴る真紅の饅頭をもっていた……

——これが——たしかによくきく薬なのだ！ 真正真銘だぞ。人間の血の饅頭は肺病によく効くんだからな。』

魯迅にとって特徴的なのは、小さい時として意味のないように思われるものに半封建半殖民地社会の恐ろしい現実絶え間なくおきている重大な意味深いことをあばきだすことが巧みなことである。「小さい出来事」という短篇には人力車夫の気高い行いが描かれている、周知のように彼らは中国の古い社会階層の最下級にある。これは1917年の冬だった、『強い北風が……街路の塵をすっかり吹き払った』ときのことである。人力車をやとったインテリには思いもかけず車夫が偶然にお婆さんをころぼしたとき車夫は責任のがれをしなかつたばかりでなく、その倒れたお婆さんにたいして感銘的なまでの心づかいをする。車夫の行いは作者に驚くべき感じを体験させる。街路の埃をかぶった車夫の姿は彼の眼には大きくうつゝた、そして離れてゆくにつれてその姿はますます大きくなっていった。『しかも彼を見るために頭を高くあげなければならなくなった。車夫からでる何かわからない力がわたくしにのしかゝり自分のなかに深く隠されているチッポケな人間』をおいだすような心もちさえた。』この「小さい出来事」の思い出は作者の意識にのこり、彼の中に生き彼を苛め、拭いさがたい痕跡として小説になったのである。『この小さい出来事は——と作者はしめくゝっている——いつもわたくしの眼底にあつて、わたくしを恥じい

(1) 魯迅選集、国立出版所、モスクワ、1954年、第1巻、81頁

らせわたくしの向上心をうながす。それはわたくしの勇氣と希望をつよめる。⁽¹⁾』

魯迅の創作方法にとって特徴的なのは情勢あるいは人物の典型的特徴、特異性、特質を、少い簡単な筆で表現するのに巧みなことである。たとえば、短篇の「孔乙己」の主人公の性格描写がそうである。

孔乙己は居酒屋の勘定台の前に坐つて酒を飲む唯一人の常連だった。彼はとても背がたかく、顔は蒼白く、みづばれと爪あとだらけの皺のよつた額、きたならしい白毛のあごひげをのばしていた。彼の着ている上衣は汚なくボロボロで、十年以上も洗いも繕いもしないみたいだった。

これは、容量の大きい透明な言葉に、感情、思想、形象を具体化することのできた作家の散文、人間と物にたいする正しく深い心理洞察と誤りのない観察をもつリアリストの散文である。

この短篇には、誰しも苦しい人生のきびしくしかもいつもかわらない真実をひらきみる。この作品の主人公とともに、作者とともに、読者の心には憤りと憎しみの思いが滲みとおる。これによって、魯迅の作品が広く普及していること、また人民の感情とねがいと有機的にむすびついている文学作品の根を容易に理解することができる。

『わたくしはできるだけ饒舌をさけようとした——と魯迅は書いた——第二次の従的な要因はほとんど詳しく述べないで、自分の思想を他人に充分完全に伝えられるだけにとどめた……わたくしは自分の目的のために背景はいらないと信じている、それゆえ、風景の美しさを描かないし、対話を多くしなかつた。』

シンタックスの論理的明確性を魯迅は形式をつよめることでなく、思想の論理過程を浮彫に表現する簡潔な言いまわしを集めることで達成している。

『もし読みづらいと思つたなら——と魯迅はつづけて語っている——読みやすくなるまで改める……自分だけしかわからないあるいは自分にもわからないような考えだした言葉を好まない……省略できることは省略する。書けないときにはむりをして書かない……』

文学言語と話言葉を近づけるという魯迅の意向は、彼のことばのシンタッ

クス構造の特殊性、文章の簡潔さにしばしば表わされている。彼の文章はふつう簡潔で厳密に組織されている。独特の結合によるシンタクスの圧縮された原則、簡潔で同時に文章の完全な思想と表現力の結合が、魯迅の言語に特別な尖鋭、浮彫、煉磨をあたえている。

魯迅はその異常な手腕をもって話言葉を文学言語に有機的にむすびつけている。形象の深刻な現実性、思想と感情を伝える真実性、彼の作品すべてをつらぬいている民族的独自性は古い文学言語の基礎の上につくられたものであるがそれでも何か新しいものである。

魯迅の活動は旺盛で多方面であった。りっぱな文学作品が彼によって創られたし、中国文学、芸術史の分野での厳正な科学的研究、鋭い暴露的な政論は彼に属する。彼は世界文学まず第一にロシヤ・ソヴェト作家の作品のよい手本の編集者、翻訳者および普及者としてあらわれた。

自由を愛好する中国人民はソヴェト人民と牢固とした同盟と友好、人民民主主義諸国との相互友情のうちに、いまや新しい社会主義国家を建設している。そこでは人民が自分の主人公となり、すべてが人民の利益に従属している。もはや中国には黒い影——死刑執行人の康大叔もいなければ、また敗惨者の孔乙己を生まだす条件がなくなった。

暗黒の反動が中国で猛り狂つた 1932年に魯迅のいった予言的な言葉、『こゝになかったものが、将来はわれわれのものになるであろう！』⁽¹⁾は現実のものとなった。

幾世紀にもわたって奴隷性が深く根をおろしているすべてのものから自由な人間の積極的な形象を創造することが、先進的リアリズム芸術の任務としてあらわれる。

現代中国社会の真実があらわされている魯迅の作品と政論には、きわめて乏しく控え目にその風格がえがかれていることがたびたびのことだとはいえ、積極的主人公の形象や高い道徳的原則と行いをもつ人びとが創造されている。魯迅の積極的主人公の特徴は、一定の道徳的資質をもち来つたものとしてだけ

(1)魯迅、書簡集、「魯迅全集出版社」出版、1946年、192頁

でなく、自己の確信と革命的理想のためにたゞかう積極的戦士として、その作品中にあらわれている。

魯迅は人びとが『敢えて言い、敢えて笑い、敢えて泣き、敢えて罵り憤り、この呪うべきところからこの呪うべき時代を追い払う』ために倦むことなくたゞかいつゞけた。

新しい積極的主人公の形象は、とくに、「葉」のなかの青年瑜児という人物にあらわされている。監獄での拷問と苛責にもかかわらず、若い革命家瑜児は銃殺されるまで自分の信念と勇気をもちつゞけ、彼の祖国——中国——は人民のものでなければならないという言葉とともに死ぬ。看守と死刑執行人とのはげしいたゞかひの鮮明な例は不法と専政とたゞかう中国の青年を鼓舞激励した。

魯迅晩年の作品で、とくに彼が中国共産党の活動とすでに密接にむすびついていた時期の政論では、その革命的発展における現実をみる才能があらわれている。これとむすびついて、1953年10月の第2回文学芸術工作者全国大会での周揚の有名な文学批評、1919年の「5・4」運動からはじまって中国文学は社会主義リアリズムの方向に発展したという顕著な事実の指摘を思いおこす必要がある。中国の優秀な作家や詩人が左翼作家連盟のまわりに団結した30年代のはじめに、魯迅は、と周揚はさらにつゞけて『社会主義リアリズムの偉大な宣伝普及者および代表者としてあらわれた』といった。

10年のあいだ魯迅の作品は読者を不屈不撓の熱烈なたゞかひへと呼びかけ彼らの思想と良心を奮いたゞせ醒めさせた。彼の作品には大きな真理、革命作家ヒューマニストの真理が伝えられている、彼のすぐれた手腕はあらゆる労働する人びとがたゞかっている偉大な事業への信念をかたくした。

魯迅はつねにバリケードの一方の側にたっていた。彼は自分の創作のすべてを中国人民の偉大な解放事業にさゞげて作家たちの先頭に立つた。彼はプロレタリア文学の成功を完全に信じていた。

『プロレタリア文学はさらに成長してゆくであろう、なぜなら、それは広汎な勤労大衆のものだからである。そして彼らが存在するかぎり彼らが鍛えら

れ勇気を出すかぎり、革命的プロレタリア文学も成長するであろう。⁽¹⁾』

魯迅の作品には中国人民の高度の思想性をもつ芸術のためにたゞかう偉大な革命家、英雄的戦士の熱烈な声がひびいている。

魯迅は離しがたい絆をもって自由人民の革命闘争とむすびつけられていた。それゆえ、『彼の創作には中国人民の偉大な理想が反映されている、中国文化の最も偉大で最も素晴らしい特徴の一つである人民性が肉化されている。マルクス・レーニン主義の光で照らされた彼の思想は、全く高められたものであり、光り輝く素晴らしいものであった。それらは中国人民の智慧、民族性格のすぐれた特徴、中国人民の革命闘争が具体化されている中国文化の優秀な特質が反映されている。まさにこのために、彼の作品は中国人民の生活の理想を反映している標準的作品である。⁽²⁾』

われわれ、偉大な魯迅の同時代人は、かぎりない感謝のおもいをもって、傑出した革命作家の生涯と活動に眼をむけ、彼についての輝かしい追憶を心にとどめ、魯迅の創作を中国人民の素晴らしい遺産としてみよう。

(1) 魯迅、短篇と評論、モスクワ、1950年、124頁

(2) 馮雪峯、魯迅——中国の偉大な革命作家、「人民中国」、第18—19号、北京、1953年、51頁